

第5章 創立100周年記念演奏会

昭和62年(1987)

昭和62年10月4日、本学は東京音楽学校の開校から数えて創立100周年を迎えた。当日、本学を会場として記念式典・〈尾上の松〉の特別演奏・祝賀会が行われたほか、前後約半年をかけて、音楽・美術両学部を挙げて次のようなさまざまな記念事業が繰り広げられた。

◎記念展覧会……学内で本学所蔵の国宝、重要文化財等の指定美術品を展示。学外の会場で、日本画、彫刻、油画、デザイン、建築などの各分野にわたり歴代の卒業生・教官の作品を展示。

◎貴重図書展……本学図書館の貴重書・準貴重書の中から美術史・音楽史・文化史において重要な位置を占める資料の展観。

◎記念楽器展……小泉文夫記念資料室所蔵アジア・アフリカの楽器を中心に展示。会場ではミニ・コンサートも行われた。

◎記念演奏会……後述する。

◎百年史編集……東京美術学校・東京音楽学校の創立から百年の歴史を、創立前史を含めて『東京芸術大学百年史』として両学部で編集・刊行。既刊の『東京芸術大学百年史 音楽学校篇第一巻』はこの日に合わせて刊行されたものである。

昭和62年度のおもな記念事業を両学部あわせて順を追って概観すると以下のようになる。

月日	事業名等	会場
5.30(土)	オーケストラ演奏会 (オーケストラ第225回定期演奏会)	サントリーホール
9.16(水)	邦楽演奏会(邦楽第37回定期演奏会)	国立劇場

9.19(土)	作品演奏会 (オーケストラ第226回定期演奏会)	サントリーホール
10. 2(金)～14(水)	デザイン、建築展(約1,000点) [美術学部]	銀座松屋
10. 2(金)～20(火)	美術学部現職教官作品展 56人 [美術学部]	有楽町西武
10. 4(日)	記念式典・特別演奏・祝賀会	学内
10. 4(日), 5(月)	ガムラン演奏会	旧奏楽堂
10. 4(日)～25(日)	指定美術展[美術学部]	本学陳列館
10. 4(日)～25(日)	記念楽器展	旧奏楽堂
10. 6(火)	室内楽演奏会	旧奏楽堂
10. 8(木)～20(日)	日本画(127点)、彫刻(84点)[美術学部]	日本橋高島屋
10. 9(金)～12(月)	オペラ公演	旧奏楽堂
10.13(火)～25(日)	油画(500点余)、工芸(265点) [美術学部]	日本橋三越
11.10(火)～29(日)	貴重図書展250点余	本学陳列館
11.27(金)	オーケストラ演奏会 (オーケストラ第227回定期演奏会)	サントリーホール

次に第5章で扱うプログラムを概観する。ここには記念演奏会以外にも、昭和62年度に行われた演奏会がいくつか含まれている。

1. オーケストラ定期第224回「新卒業生紹介演奏会」
2. 100周年記念演奏会Ⅰ(オーケストラ第225回定期演奏会)フランス音楽を手掛けては世界屈指の指揮者を迎えてフランスの作品を3曲演奏。
3. 100周年記念演奏会Ⅱ(邦楽第37回定期演奏会)伊澤修二作詞の祝賀曲を含み、能楽も参加。
4. 100周年記念演奏会Ⅲ(オーケストラ第226回定期演奏会)作曲科常勤教官全員による新作発表演奏会。
5. オペラ第33回定期公演 モーツァルト作曲「コシ・ファン・トゥッテ」を上演。出演者の少ない100周年記念演奏会以外に定期公演も行われた。
6. 100周年記念演奏会Ⅳ 元外国人教師サプトノ氏を招き、ガムラン導入以来の14年を振り返りその成果を問う。

7. 100周年記念演奏会Ⅴ 室内楽演奏会 教官と学生による室内楽。
8. 100周年記念演奏会Ⅵ オペラ公演 日本最初のオペラ公演の曲目を移築された旧奏楽堂で再演。
9. 11月、東京音楽学校の初代校長伊澤修二の郷里、長野県上伊那郡高遠町で「伊澤修二先生記念祭」が行われ、本学の学生および学生オーケストラが出張演奏した。その時の記念演奏会のプログラムと当時の服部学部長の記念講演を掲載する。地元の小学生を前にして行われた講演は、伊澤修二の生い立ちから青年時代、そして並外れた努力で音楽を学び、東京音楽学校の初代校長となつたいきさつ、さらに初代校長の業績に至るまで、平易な言葉で総括的に語るものとなっている。演奏会篇の終わりに東京音楽学校の開設当時を振り返り、伊澤校長の信念や気概に思いを馳せることはふさわしいことであろう。
10. 吹奏楽第53回定期演奏会。
11. 100周年記念演奏会Ⅶ（オーケストラ第227回定期演奏会〈合唱付〉）後期ロマン派の終焉を飾る傑作〈グレの歌〉。
12. オーケストラ第228回定期演奏会 学生オーケストラ。

オーケストラ第224回定期演奏会（新卒業生紹介演奏会）

1987年4月21日（火）

東京文化会館大ホール

開演●6：30

作 曲 佐 藤 昌 弘
 ピ ア ノ 岩 井 美 子
 打 楽 器 田 邊 由 紀
 フ ル ー ト 森 田 み どり
 ヴァイオリン 漆 原 啓 子

プ ロ グ ラ ム

- オーケストラ・フェイズⅡ……………佐藤昌弘
Orchestra Phase II M. Sato
- ピアノ協奏曲第2番 ヘ短調 作品21……………ショパン
Piano Concerto No. 2 in F minor op. 21 Chopin
- 休 憩 —
- マリンバとヴィブラフォンのための協奏曲……………ミヨー
Concerto pour marimba et vibraphone D. Milhaud
- フルート協奏曲 作品30b……………尾高尚忠
Flute Concerto op. 30 b H. Otaka
- ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 作品47……………シベリウス
Violin Concerto in D minor op. 47 J. Sibelius



佐藤昌弘



岩井美子



田邊由紀



森田みどり



漆原啓子

管弦楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

GEIDAI PHILHARMONIA

指揮 遠藤雅古 Masahisa Endo

松尾葉子 Yoko Matsuo

100周年記念演奏会 I (オーケストラ第225回定期演奏会)

1987年5月30日(土)

サントリーホール

開演●7:00

プログラム

幻想交響曲 作品14

ベルリオーズ

Symphonie fantastique op. 14.....H. Berlioz

——休憩——

牧神の午後への前奏曲

ドビュッシー

Prélude à l'après-midi d'un fauneCl. Debussy

「ダフニスとクロエ」組曲 第2番.....ラヴェル

Daphnis et Chloé, Suite no. 2M. Ravel

指揮 ジャン・フルネ Jean Fournet

管弦楽 東京芸術大学管弦楽研究部 Geidai Philharmonia

御挨拶

東京芸術大学長 藤本能道

東京芸術大学は、旧東京美術学校と東京音楽学校が昭和二十四年に合体した、わが国で唯一の国立芸術大学であります。

両校発祥の経過はそれぞれに違っておりますが、奇しくも両校が、東京美術学校、東京音楽学校の名称を明確に名乗ったのは明治二十年であり

ました。

それから数えて、本年は百年目に当たります。長い歴史を振り返り見れば、その流れは必ずしも順調な時ばかりではありませんでしたが、多くの人材を養成し、わが国の芸術界に大きな役割を果たして来ました。

本年は創立百周年記念行事として演奏会、楽器展、美術展覧会、貴重図書展等、数回にわたって開催致すことになっております。

それらの行事の第一段として、フランスの名指揮者ジャン・フルネ氏を招いて記念演奏会を催します。

この記念行事に御協力いただきました方々に心から感謝の意を表し、御挨拶と致します。

昭和62年5月

100周年記念行事を始めるに当たって

東京芸術大学音楽学部長 服部幸三

東京芸術大学音楽学部は、明治12(1879)年に設置された音楽取調掛を前身としてスタートしました。その後、明治20(1887)年に音楽取調掛は改組され、東京音楽学校が生まれましたが、本年は東京音楽学校誕生の年から数えてちょうど100周年を迎えます。世の中の多くの方々の温かいご支援を得て100周年を祝うことが出来ますことは、私ども一同にとってこの上ない喜びであり、この席にご臨席の皆様をはじめ多くの方々のご理解とご厚意に厚く御礼申し上げます。

東京音楽学校が歩いてきた道は、必ずしも平坦なものではありませんでした。明治24(1891)年には、時の帝国議会で音楽学校存廃論が闘わされ、初代校長伊沢修二は、音楽学校の必要性を主張して譲らず、ために非職を命ぜられました。また、第2次世界大戦のさなか、音楽学校は声なき廃墟の一手前まで、追い詰められていました。しかし、その一方で、明治45(1912)年に始められた土曜コンサートは、多くの市民に親しまれ、今は上野公園の中に移築された奏楽堂を拠点とする本学の演奏活動は、そのまま日本における近代音楽の歴史を形作って参りました。時の流れの中

で、浮沈を重ねながらも、洋楽及び邦楽の両方面で日本の音楽界に多数の
人材を送り出し、今日あることに感謝しつつ、100年の歴史から記憶すべ
き出来事の一部を拾ってみます。〔中略〕

以上、100周年の記念行事を始めるに当たって、ご挨拶を申し上げ、重
ねて多くの方々のご厚意に感謝するとともに、皆様のご声援のほどをお
願い申し上げます。

MESSAGE

Je me félicite de la célébration du centenaire de l'Université
nationale des Arts et de la Musique (GEIDAI). Depuis ses ori-
gines, cette prestigieuse université a joué un rôle de première
importance dans l'enseignement et la diffusion de la musique
classique et contemporaine.

M'est-il permis de souligner aussi combien l'école française
de la musique doit à GEIDAI? Je sais que les professeurs et les
élèves de cette université ont contribué et contribuent encore
largement à mieux faire connaître et apprécier cette école, qui
rayonne aussi grâce aux concerts de qualité qui s'y donnent.

Ce concert, que dirige Jean FOURNET avec l'Orchestre de
l'Université, me semble illustrer avec excellence cette profonde
affinité spirituelle qui est la source de notre amitié et de notre
dialogue et qu'entretient tous les jours cette glorieuse université.

Dans l'avenir, GEIDAI continuera, j'en suis sûr, à jouer
son rôle dans les relations entre la France et le Japon, entre la
communauté musicale japonaise et la communauté musicale
française.

Albert TUROT
Chargé d'Affaires a. i.

100周年記念演奏会Ⅱ（邦楽第37回定期演奏会）

昭和六十二年九月十六日（水）午後五時三十分

三宅坂国立劇場大劇場

主催 東京芸術大学音楽学部

後援 読売新聞社

ごあいさつ

東京芸術大学音楽学部長 服 部 幸 三

東京芸術大学音楽学部は、伊沢修二の手で明治20年10月4日に東京音楽
学校が開設されてから数えて、本年、創立100周年を祝います。開校の祖
伊沢修二は、それに先立ち、明治12年に音楽取調掛の業務を始めるに当た
り、箏曲の大家山勢松韻や長唄に心得のある英学者内田弥一等の助力を仰
ぎました。また、駿河台の分教場に設けられていた選科では、能楽・長唄
・箏曲の専門実技が教授されていました。そのような基礎の上に、昭和11
年に本科邦楽科が設けられ、能楽の観世左近、宝生九郎（重英）、長唄の吉
住小三郎、山田抄太郎、箏曲の宮城道雄、中能島欣一などの指導のもとに
発展をとげ、学風を確立して今日に到っています。

自国の伝統的な芸術を大切にすべきことは、言うまでもなく、中国や韓
国をはじめアジアの近隣諸国では、国立の音楽院で自国の伝統音楽が熱心
に保護育成されていますが、日本では、芸大の邦楽科がすでに半世紀を超
える歴史をもってその役割を果たして来たことにご注目をいただきたいと
思います。今回の100周年記念演奏には、芸大邦楽科の現職教官、学生及
び卒業生がこぞって参加し、開校の祖伊沢修二の作詞による合同曲《晴天
の鶴》ほか、各ジャンルにわたって100周年にふさわしい邦楽フェスティ
ヴァルを繰り広げます。

ご来場の皆様に温かいご声援を頂ければ、喜びこれに過ぎるものはあり
ません。

一、邦楽合同

晴天の鶴	唄	赤木直明	箏	増	渕	任	朗
仕謡	舞曲	佐藤	野波	重	三味線	菊	忍
		藤	波	明	三味線	岡	亨
		小	川	明	尺	見	郎
		関	根	知	八	山	五
		下	平	克		口	

朗一裕之 子能緒 代子枝
厚谷隆浩 節法 百和順
任古間野 山口崎下 藤
増鈴三大佐 小井尾山 岸高佐
三絃 唄

寛尋助 智雄子 弘子 穂郎 吉美 記子
千之 邦綾 光名 千太 左晴 英朋
田原野 浦崎尾 奈木 月月生 藤田
山平福中 杉山 長植 荒望 望瓜 工柳
笛 小鼓 太鼓

(箏替手 唄) 三絃 唄

能子代子子み華 子朋子美尋
香知智路弓佳な 田生晴千
山真間原林藤 宮田瓜平
龜松寺草松小伊星 笙 大鼓 小鼓 笛

文加子佳紀彦一亨子江花紀子子樹紀之
直孝由明義 佳里彩直智美由雅
島井辺見田前坂見島田沢岡田口塚口橋
小浅川味山岩藤味田原滝中浜野石山大
高 音 替手 I 本手 替手 II 調子 低
郎典彦明子わ紀代子子子実
太孝和直春し亜桃頼圭雅真
口柳垣木川村内沢藤保久沼藤
山青西赤市志竹芦加大長近
唄

五、長 唄

鶴 龜

六、舞囃子（観世流）

田 村

七、狂 言

福の神

シテ 藤波重満 大鼓 柿原 崇弘 志弘 菅 藤田朝太郎
小鼓 幸 昭 弘 田関小下 晴孝宏宏
地謡 分吉馬 道寿正 林浪野 基知明克
シテ 野村万之丞 アド 小アド 野吉 村積 武史 司高

二、箏曲（生田流）

根 曳 の 松

江子照 子穂里江子子 博子子子香美
康知正 直奈保邦友衣 一朋貴菜美留
川崎藤 内野嶋井川麻 関原真美田波
砂砂安 寺上飯藤広岡 井松合吉野野
三絃本手 三絃替手

子穂み江代子子子 子子穂子子子之
明美と昌一敦奈理 順章美裕信妙啓
崎垣海沢笠田野瀬 宮田山村場條木
矢芦深吉衣木矢牧 新村小田馬上白
江和子子子子子
仁紀智久京仁
井浦井保紀美橋久
藤大藤大佐藤市帶

三、尺 八

鶴の巢籠
鹿の遠音

山 山 潔恭一 樹治美
篁 邦 万宗 康健由
原 本 田辺生田澤下
北 山 柴渡瓜藤羽松
郎 慕 二和介久志開
五 鈴 裕秀恵義武
口 木 丸藤寺井本月
山 青 徳加善大笹望

四、箏曲（山田流）（箏本手 唄）

都の春

子子子能み美幸子
勢司都子子能み美幸子
山神山上村橋森入江
勢保口村橋森入江
山神山上村橋森入江
賀枝子能美江弓子織
千延靖香徳戸美香
美延靖香徳戸美香
岸池部橋真藤卷下野
小溝本加荒野中

准
介
人
大
野
村
久
地
話

八、能楽（宝生流）

高 砂 シテ 佐 野 萌 大鼓 柿 原 崇 志 太鼓 観 世 元 信
祝言 ワキ 宝 生 閑 小鼓 幸 昭 弘 笛 藤 田 朝 太 郎
後見 久 貫 弘 能 山 内 崇 生 佐 野 由 於
渡 辺 若 子 地 話 辰 巳 満 次 郎 宝 生 英 照
東 川 光 夫 朝 倉 俊 樹

100周年記念演奏会Ⅲ（オーケストラ第226回定期演奏会）

100周年記念新作展

1987年9月19日（土）

サントリー大ホール

主催●東京芸術大学音楽学部

後援●読売新聞社

プログラム

電子交響曲 第3番……………南 弘明
Elektronische Sinfonie Nr. 3 *Hiroaki Minami*

シンセサイザー：南 弘明 *Synthesizer: Hiroaki Minami*

音響：(株)サウンド・クラフト *Sound: Sound craft*

弦楽四重奏曲……………尾高惇忠
Quatuor à Cordes *Atsutada Odaka*

第1ヴァイオリン：田中千香士 *Vn I: Chikashi Tanaka*
第2ヴァイオリン：石川光太郎 *Vn II: Kōtaro Ishikawa*
ヴィオラ：川崎和憲 *Vla: Kazunori Kawasaki*
チェロ：田中雅弘 *Vc: Masahiro Tanaka*

ブネウマー弦楽のための……………松村禎三
Pneuma for Strings *Teizo Matsumura*

指揮：松村禎三 *Cond.: Teizo Matsumura*

管弦楽：東京芸術大学管弦楽研究部 *Orchestra: Geidai Philharmonia*

—休 憩—

交響壁画—祝典幻想曲……………野田暉行
FRESQUE SYMPHONIQUE—Fantaisie Festivale—
Teruyuki Noda

指揮：野田暉行 *Cond.: Teruyuki Noda*

管弦楽：東京芸術大学管弦楽研究部 *Orchestra: Geidai Philharmonia*

シェーナ……………浦田健次郎
Scena *Kenjiro Urata*



南 弘明



尾高惇忠



松村禎三



野田暉行



浦田健次郎



佐藤 真

指揮：小鍛冶邦隆 *Cond.: Kunitaka Kokaji*
 管弦楽：東京芸術大学管弦楽研究部 *Orchestra: Geidai Philharmonia*
 管弦楽のための協奏曲……………佐藤 眞
Concerto per Orchestra Shin Sato
 指揮：佐藤 眞 *Cond.: Shin Sato*
 管弦楽：東京芸術大学管弦楽研究部 *Orchestra: Geidai Philharmonia*

ごあいさつ

東京芸術大学音楽学部長 服部 幸三

東京芸術大学音楽学部は、伊沢修二の手で明治20年10月4日に東京音楽学校が開校されてから数えて、本年、創立100周年を祝います。幸田延、滝廉太郎、三浦環、山田耕筰等の名前は、そのまま日本の洋楽史であり、第二次世界大戦までは、演奏と作曲の両面で、日本の洋楽界を支えて来たのは、まさに東京音楽学校でありました。戦後は、公立・私立の音楽大学や各種の音楽教室などの発展で、日本の音楽を支える基盤は大きな拡がりを見せました。しかし、東京芸大音楽学部は、今日なお大きな地位と責務を担っています。

私たちは、ここで開校の祖である伊沢修二が、東京音楽学校の開設に立つ音楽取調掛の事業として「国楽の創成」に重点を置き、自叙伝の中でも『自分も作り又他にも作らせた』〔楽石自伝、教界周遊前記81ページ〕と述べていることを忘れることはできません。作曲科の常勤教官が1曲ずつの新作を書き、音楽学部のスタッフが中心となってこれを演奏する今回の「新作展」は、この伊沢修二の理念を受け継ぐもので、東京芸大音楽学部の「いま」をご紹介しますイベントとして企画致しました。ご来聴の皆様にご批判とともにご声援をいただければ幸いに思います。

プログラム・ノート

電子交響曲 第3番……………南 弘明

五年まえ、シンセサイザーと管弦楽のため楽曲を作曲したが、当時のシンセサイザーはアナログが主体であった。このあとデジタルのシンセサイザーがめざましく発達し、音の高さ、長さ、強さの制御と音色の合成が以前の数倍の精度で実行可能となった。さらにまた、コンピューターをシンセサイザーに直結し、音色の合成と作曲が可能になったばかりでなく、作曲のデータをフロッピーディスクに保存し、容易に再演もできるようになった。今回はこの方法によって作曲され、シンセサイザーを生演奏するもので、従来のような録音テープによるものではない。

第一楽章……ノイズ成分の多い音を主体とした楽章で、使用した音色は23種類。

第二楽章……三つの部分からなる緩徐楽章で、透明な音色と不透明な音色が対比的に扱われる。使用した音色は七種類。

第三楽章……人の手による楽器演奏では演奏不可能な「超プレスト」の楽曲である。使用した音色は六種類。

今回使用する機器はつぎのとおりである。

シンセサイザー：TX-816（ヤマハ）

コンピューター：PC-9801（NEC）

コンピューターソフト：RCX-PC98（COME ON MUSIC）

残響装置：REV-7（ヤマハ）

再生装置：サウンド・クラフト社提供。

弦楽四重奏曲……………尾高惇忠

私は数年前、独奏チェロのための“Méditation”（瞑想）と言う曲を書いたが、その時独奏曲故に充分には果しえなかったことを、より幅広い表現の可能性を持つ弦楽四重奏で再度追い求めてみたかった。すなわち自己の奥深い所に潜む心の動き、心の歌と言ったものを弦楽四重奏の美しい響きにのせて歌いあげてみたかった。曲はバラード風に展開される単一楽章によっているが、構成にあたっては、曲の核となる数個の素材を第一の場

で順次提示し、それらが必要に応じて変容し、さまざまな音楽の場を形成してゆくことを志した。

今年は芸大の100年祭、100年の歴史をふりかえりその重みを再認識し、又新たな可能性を求めて旅立つ時だ。この折に私はいま一度音楽の本質について静かに考えてみたいと思っている。今日拙作を演奏して下さる田中千香士先生はじめ四重奏のメンバーの方々に心より感謝致します。

プネウマ—弦楽のための— ……………松村禎三

“プネウマ”はギリシャ語で、「風」と「息」と「霊」という三つの意味がある。円覚上人は、風が体内に入って息となる、と説かれている。風自体は音をもたないが、万物に吹きつけると、万物が夫々固有の音を発する。音のない風に無限に音が秘められている。これが天籟である、と莊子も説いている。且つて私は敦煌周辺を訪れた時、陽関址の砂漠に立って、遙か天上の微かな風の音を聴いたことがある。

“プネウマ”という言葉は井上洋治氏の著作から知り、その時以来、この言葉は私の中に棲みついている。

弦楽合奏によって、音と響きの消長を私なりに追究してみたいと思いついてかなりの時間を経過している。今回、東京芸術大学百周年の記念演奏会を機に実現することにした。

曲は単一楽章、十分たらずのものである。

交響壁画—祝典幻想曲— ……………野田暉行

芸大が創立百周年を迎えるというのを聞いて、二つの感慨を禁じ得ない。もう百年も経ったのかという思いと、まだ百年経ったにすぎないのかという思いである。

その百年は、まさに日本の洋楽史の長さそのものであり、そのことを思う時、感慨は又一段と強まるのである。

そして、私自身、いつの間にか、すでにその歴史の四分の一以上にかかわっているということにも、不思議な感慨を覚えなければおれない。

この曲は、その百年の歴史へのオマージュであると同時に、これからの百年に寄せる私の幻想曲でもある。曲は、終局に姿を現すコラル・ファンファーレとでもいうべき主題によって構成される、一卷の絵巻物である。

フレスコとは、壁画等に用いられる乾漆技法の名称であるが、この作品の作曲過程と構成法が、即座に私にそれを想起せしめたため、このタイトルを付けたものである。又、日本語では「壁画」とした。

管弦楽は、3管編成フルオーケストラ（4トランペット、6打楽器、ハープ、ピアノ）の他に、8人のファンファーレ隊が別に配置される。管弦楽部の御協力に感謝する次第である。

シェーナ ……………浦田健次郎

「単純の深さ」という言葉がある。これは芸術の一つの極致であろう。また一方、絢爛たる芸術も一方の極致であろうが、今の私にはあまり興味がない。

この曲を作曲中、常に「単純の深さ」を意識しつつけていた。それが至難なことは承知している。ただ、極力装飾を排し、必要不可欠なものを、単純に、平易に書くことに努めた。

曲は、ほぼ同時に奏される弦楽器を主体とした2つの主題と、それに続くトランペットによる副主題が、様々に変容、デフォルメされコードに至るが、全体は4つの部分から出来ている。

曲名のシェーナは、舞台、背景、場、場面などの意味であるが、一方オペラでは劇唱と訳され、普通アリアの前に歌われる。この曲が、芸大100周年という「場面」で演奏されること、そして私の「うた」であることによっている。

東京芸術大学が、一つの大きな節目として、100周年を迎えたその時、作品を書く機会を与えられたことを幸運に思う。

この演奏会のために尽力された多くの方々に深く感謝いたします。

管弦楽のための協奏曲……………佐藤 真

今夜の演奏会自作の自演を特別に受け入れて下さったオーケストラの方
 方に対する感謝の気持ちを表わしたいと思い、この「管弦楽のための協奏
 曲」を作曲しました。その名の通りこの作品ではオーケストラの各セクシ
 ョンや奏者一人一人のすぐれた力量が効果的に発揮されるように意図して
 あります。曲は五つの部分から成り、そこでは私がこれまでに追求したオ
 ーケストラの音のパレットのうち主要なもの殆んど全てが活用されていま
 す。

この演奏会の開催に御尽力いただいた関係各位に対し、ここに心から感
 謝の念を表します。

〔批評〕

斬新さ披露した佐藤真

芸大百周年記念作曲新作展

芸大創立百周年記念事業の一つとして、芸大オーケストラ定期・第二二
 六回が芸大作曲科スタッフの新作展にあてられた（19日、東京・サントリ
 ーホール）。

一曲目は南弘明の「電子交響曲第3番」。南がステージ上方、オルガン
 のパイプの下でシンセサイザーを奏する。新しいメディアの陰から伝統主
 義者・南の基礎がうかがわれる。特に第二楽章の二つの音色の対位的処理
 は見事だった。ただ、今日ではこの新しい音色がもはや通貨のように消費
 されている、という一面も否定できなかった。二曲目は尾高惇忠の「弦楽
 四重奏曲」。既に共通の理解が成立してしまった信号法（コード）に依拠
 する作品。多分、素材が「変容し、さまざまな音楽の場を形成してゆく」
 成り行きを聞ければそれが正しい聞き方なのだろう。演奏は田中千香士・
 石川光太郎・川崎和憲・田中雅弘。三曲目は松村禎三の「プネウマ―弦楽
 のための一」。冒頭のプネウマ（風・息）を模した音色は印象的だった。
 バイオリン独奏のあとからはおなじみのパターンが歌われる。形式的にも
 大きな山がいったん収束したあと、再び短い盛り上がりで終わるという手

堅さ。作曲者の指揮。

休憩後、最初は野田暉行の「交響壁画―祝典的幻想曲」^{〔ママ〕}。フル編成に加
 えて二階席後方に八人のファンファーレ隊をおくという大絵巻。過去百年
 へのオマージュであり、未来百年への幻想曲でもあるという。彼は楽観主
 義者のようだが、私は悲観的な立場から、彼の描く未来像に同意する。壮大
 な大音響。これも作曲者の指揮。次は浦田健次郎の「シェーナ」。「単純の
 深さ」を追求した作品とのことだが、単純という言葉から今日、私達が最初
 に思い浮かべるミニマリズムと、彼は全く関係がない。単純のかわりに素
 朴というにはアカデミックだし、適切な用語は思いつかない。指揮は小鍛
 治邦隆。最後は佐藤真の「管弦楽のための協奏曲」。この日、最も斬新（ざ
 んしん）なアイデアを聞かせてくれた。さまざまな輝きをもつ断片の連続。
 ただ、時々あらわれる慣習的な音型が聴き手に混乱を与える。作曲者の指
 揮。終わり四曲は東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部による。六曲とも、
 あたたかい聴衆から大成功に匹敵する拍手をえた。（松平頼暁・作曲家）

〔原資料縦組〕

（『朝日新聞』昭和62年9月24日）

オペラ研究部第33回定期公演

芸大 100 年

東京芸術大学音楽学部 オペラ研究部

第33回定期公演

1987年9月30日（水）10月1日（木）

芝、郵便貯金ホール

開演●6時30分

ごあいさつ

オペラの研究者として有名なデントは、「18世紀のオペラはアレッサン
 ドロ・スカララッティに始まり、モーツァルトに終わる」という明言を残
 した。18世紀オペラのさまざまな流れがモーツァルトでひとつに集まり、

見事な完成度に高められている。格調の高い悲劇的なドラマを筋書きにしたオペラ・セーリアの場合も、世話物風の面白可笑しい筋書きを持つオペラ・ブッフアの場合もそうである。その完成度がいかに高いものであったか、他ならぬオペラの作曲家ロッシーニがこう証言する。『音楽で言うところ、ドイツ人たちはもともと和声の大家だったし、われわれイタリア人は旋律家だった。しかし、北の国がモーツァルトを生み出してからは、われわれ南国人は、自分の土俵でも負けてしまった。この人は両面ですぐれているのだから』。

東京芸術大学音楽学部オペラ研究部は、かつてはロッシーニの《アルジェリアのイタリア人》ほかの作品を次々に日本初演した時期があったが、ここのあるところ連続してモーツァルトの作品を取り上げている。完成品は、同時に試金石である。どんなに磨いた演奏でも、磨きすぎることはない。ご来聴の皆様方にご批判とともにご声援をいただければ幸いである。

東京芸術大学音楽学部長 服部幸三

今回、芸大オペラ研究部第33回定期公演として、モーツァルト作曲、「コシ・ファン・トゥッテ」を上演することになりました。このオペラは「ドン・ジョヴァンニ」、「フィガロの結婚」につづく傑作で、中に含まれている重唱・アンサムブルは無類に美しく、人間本来の姿が絶妙に描かれており、楽しさと魅力に溢れたこの名作は今尚燦然と輝いております。本学オペラ研究部では、モーツァルトのオペラ研究を更に深めるため昨年の「フィガロの結婚」につづいて、「コシ・ファン・トゥッテ」を取り上げました。楽譜はベータース版に基づき、原語上演といたしました。管弦楽研究部の多大なる御協力と共に、指揮の大町陽一郎先生、演出の長沼廣光先生をはじめ、諸先生方の誠意溢れる御指導を得て、皆が最善の努力を重ねて参りました。何分若い学生が主体となった演奏で、或は至らない点も多いことかと思いますが、暖かい御批評をいただければ幸甚であります。

御来聴を心から感謝いたします。

オペラ研究部長 伊藤亘行

コシ・ファン・トゥッテ 全二幕 (原語上演)

W. A. モーツァルト作曲 ダ・ボンテ台本

COSI FAN TUTTE

Opera in 2 acts (in ITALIAN)

W. A. MOZART

指揮 大町陽一郎 演出 長沼 廣光

装 置	石 井 みつる	副 指 揮	高 橋 誠 也
照 明	奥 畑 康 夫	合唱指揮	"
衣 裳	渡 辺 園 子	チェンバロ	小 谷 彩 子
舞台監督	直 井 研 二	コーチ	勝 郁 子
演出助手	国 松 真知子	"	小 谷 彩 子
舞台監督助手	賀 川 祐 之		
"	山 内 宰		

大・小道具 NHK美術センター 照明操作 A. S. G.

衣 裳 東京衣裳株式会社 か つ ら 株式会社 丸善

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部

東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生

合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽科3年オペラ履修生

オーケストラ 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

キ ャ ス ト

		30日	1日
フィオルディリージ	Fiordiligi	小 林 久美子	三 輪 典 代
ドラベッラ	Dorabella	西 川 裕 子	河 野 め ぐ み
デスピーナ	Despina	正 木 裕 子	横 山 美 奈
フェランド	Ferrando	吉 田 浩 之	絹 川 文 仁
グリエルモ	Guglielmo	大 貫 史 雄	経 種 康 彦
アルフォンゾ	Don Alfonso	片 桐 直 樹	高 井 治

100周年記念演奏会Ⅳ（ガムラン特別演奏会第4回）

ガムラン特別演奏会 第4回

—東京芸術大学創立100周年記念演奏会Ⅳ—

1987年10月4日(日)・5日(月) 開演●6:30

旧東京音楽学校奏楽堂

主催：東京芸術大学音楽学部

後援：読売新聞社

ごあいさつ

東京芸術大学音楽学部長 服部 幸三

東京芸術大学音楽学部は、本年創立100周年を迎え、さまざまな記念の行事を行います。開学記念日(10月4日)を期して旧東京音楽学校奏楽堂でガムラン演奏会を催すことが出来るのは大きな喜びであります。芸大のガムランは、日本の民族音楽学研究の第一人者であった故小泉文夫教授が、インドネシアのジャワ島で人々の生活の中に根付くガムランの音楽的な魅力と芸術性に目を開き、それを日本に導入しようとしたことから始まります。当時の池内友次郎音楽学部長の深い理解のもとに、小泉教授はかつてジャワの王宮に伝わった由緒あるガムランのセットを輸入し、また現地から優れた演奏家であり、舞踊家であるサプトノ氏を招きました。それは、昭和40年代に大学紛争の嵐が吹き荒れた後に、新しい価値観がさまざまな領域で目覚めようとした時期のことでした。世界の民族音楽に対する興味は、それ以来ひとつの拠点を得て、静かなブームを呼び起こし、多数の共鳴者を得ることになりました。

今回は、昭和54年から久しく芸大のガムランを指導されたサプトノ氏のほか4名の方をインドネシアからお招きし、100周年を祝う儀典曲、古典舞踊のほか、日本の作曲家による新作をご披露します。少しでも多くの方々に、脈々と生動する民族音楽の息吹の一端に触れていただければ、幸いに思います。なお、この機会を借りて、旧奏楽堂の再建保存に手を差し

延べられ、今回、芸大100周年の記念行事に快くお貸し下さる台東区のご厚意に、心から御礼申し上げます。

*メッセージ

招聘芸術家代表 サプトノ

芸大ガムラン小史

田村 史

芸大にガムランの楽器が到着したのは1973年の11月のことである。私はちょうどそのころガムランとインド音楽を実地に勉強するためアメリカに留学していた。年末に帰国した私は、大学の一号館一階の旧会議室に並べられたガムランを見て、そのあまりの美しさに息をのんだ。カーテン越しの光を受けて青銅の楽器たちは深海の真珠貝のようにきらめき、均整のとれた輪郭を浮き上がらせていた。龍体の巻きつがごとく彫刻を施された高い木枠に厚重な響きを予感させて大小のゴングが揺れ、青銅の壺や鍵盤を並べた木台にはシンボリックな彫刻が朱と緑色の彩色でシャープな線をみせていた。彫りの背の部分に金箔がおかれ、にぶく金色に輝いていた。それから14年がたって私は実に多くのガムランに出会ったが、このガムランほど美しい楽器を見たことがない。故小泉文夫氏がジャワのソロ市で見つけたこの楽器に深く執着し、2年半の歳月をかけて芸大に導入すべく努力なさったのも、うべなるかなである。そして、私の先輩達をはじめ実に多くの人々がガムランに心をひかれ長くガムランとの付き合いを続けているのも、この素晴らしい楽器のせいではないかとも思うのである。

悔しいことにガムランの活動も他の多くの学問分野の例に違わず、欧米の思潮の影響を受けて始まった。民族音楽学研究の方法として実技を重視するやり方が特に顕著になったのは、1960年代の後半である。小泉氏がアメリカの民族音楽学者R・ブラウンの招きでウェスリアン大学に客員教授として赴いた1967年ごろ、アメリカの多くの大学では、アジアや世界各地の音楽と舞踊の実技がカリキュラムの中に取り入れられていた。ウェスリアン大学でも日本音楽やガムランが教えられており、小泉氏はそこでガムランの魅力と出会うことになる。その後何度かインドネシアを訪れた彼

は、ガムランを芸大の教育活動の中に定着させるための努力を続けた。ガムランのなんたるかを知っている人のほとんどいなかったこの時期に彼の苦労はいかばかりだったか。しかし、当時の音楽学部長池内友次郎氏を始め何人かの理解者を得て、計画は着実に実現していく。私は、高校生であった1967年にNHK・FMで小泉氏の話とガムランを聞き、深く感動して民族音楽学への進路を予感する。1973年にR・ブラウンのもとに留学したあと、1979年にサプトノ氏が外国人教師として招聘されるまでの6年の間に私は通算4年インドネシアに留学しガムランと舞踊の研究を続けた。小泉氏と私の持ち帰る資料が当時のガムラン活動の主な教材であった。何人かの先輩達を始めとしてこの時期にガムランとの付き合いをはじめた人々は、いわば本当の意味での指導者を欠く状態であったのにもかかわらず、非常に熱い出会い方をしている。そして現在まで息の長い付き合いを続けている人が多い。

1979年の春ジャワのソロ市からサプトノ氏が外国人教師として芸大に招かれた時、ガムランの新しい時代が始まった。ヨーロッパ音楽を中心に据える日本の音楽大学にアジアの国からアジアの伝統音楽を教える指導者が招聘されるということは、劇的な意識変革を意味する。ヨーロッパ音楽の素養を持つ学生達とアジアの生粋の音楽家との出会いは、さまざまなカルチャー・ショックと摩擦を生じながらも、双方が多くのことを学びとってガムランの活動は活性化した。その成果は3年後の1982年の1月、芸大主催のガムラン特別演奏会という形で世に問われることになる。専科があるわけでもないのに演奏会が開催されるのは、芸大では初めてのことであり、小泉氏のよき理解とサプトノ氏の熱心な指導に応える学生達の力がその実現を可能にしたのである。また、楽理科の先生方や当時の音楽学部庶務課の方々の暖かい協力を忘れることはできない。1月の寒さの中を、芸大に来て以来初めてガムランは学外に運び出され、会場の東京文化会館小ホールは入りきれない程の人々で埋まった。演奏の内容は未熟なものであったかもしれないが、ヨーロッパ音楽偏重の社会に対するメッセージとしてこの演奏会の歴史的な重要性は否定できない。以後、学外での演奏活動

が増え始め、学生達とサプトノ氏はガムランの普及活動の先鋭部隊のようになってしまった。その中で日本人がガムランを演奏する事の意味を問いなおそうとする動きが起き、1984年にサプトノ氏が帰国してから一つのガムラン演奏グループが芸大から独立する。また、深くガムランを研究し実技を究めるために多くの学生がインドネシアに留学するようになった。

サプトノ氏が帰国したあと、私はガムランの実技の授業を受け継いだ。たかだか10年の修業しか積んでいない外国人にガムランの高度な技術と感性を伝え得るはずもないが、洋楽或いは邦楽の素養しかない学生にそれとは全く異なる音楽的アイディアを知ってもらい、柔軟な感性と創造的な思考力のトレーニングをしてもらいたいと思って授業を続けている。毎年授業を履修する学生は40人ほどであるが、最近ではその半数が作曲科の学生である。以前は楽理科の学生が大部分であったのに比べて大きな変化である。その中にはガムラン的なアイディアを用いて洋楽の楽器で作曲をしたり、ガムランを使って新しい試みをしようとする者がいる。芸大以外の音楽大学でもガムランの楽器を購入しカリキュラムに取り入れようとする動きが1980年ごろから活発になっている。また、教育機関以外でのガムランの活動も活発化している。そのような状況でパイオニアである芸大の役割は重要であり、今後も長期的な展望のもとに慎重かつ大胆な活動がおこなわれるべきだと思う。具体的にはインドネシアから優れた指導者を招聘してガムランの実技をさらに徹底して行うこと、それと平行してオリジナリティーのある研究活動（恐らく共同の）を行うこと、新しいガムラン作品の誕生のために常に刺激を与え続けること、だと思う。従って、音楽学部の演奏委員会の強い推薦と大学の理解のもとに、このような演奏会を開催することができることは、このうえもない喜びである。そして、かつて芸大のガムランと関係のあった多くの人々から暖かい協力の得られたことを、深く感謝するものである。

芸大にガムランの楽器が来てから14年がたとうとしている。小泉氏の話によれば、このガムランはソロのパク・ブウォノ9世（在位1861～1893）

の所蔵品であったというから、少なくとも100年の齢は重ねていることになる。このように由緒あるガムランには必ずといってよいほど銘がつけられているものなのだが、このガムランにはそれが見当たらない。以前から不思議に思っていた私は、本演奏会にも来日するガムランの長老ムロヨウイド氏に伺ってみた。あの楽器は確かに王宮の名器に準えて作られ、パグ・ブウォノ9世に献上される筈のものであったが、事情があって実現せず従って銘が付けられていない。だからあのガムランには強い霊は付いていない。日本の皆が大事にして新しい心を入れてゆけばいい。と、彼は話してくれた。彼を迎えてのこの演奏会が本当の意味でのガムランの入魂式になるかもしれないと、その時私は思ったのである。

(芸大非常勤講師)

● ● ● 演 目 ● ● ●

1. 《儀典曲》 *Tukung* トウコン *pl. barang*
2. 《祝 曲》 *Wilujeng* ウイルジュン *sl. manyura*
3. 《古 曲》 *Gambirsarwit* ガンビルサウエ
～*Kembang Tanjung* クンバン・タンジョン
～*Ayak-ayakan* アヤ・アヤアン *sl. sanga*
4. 《舞 踊》 *Golek* ゴレ
(伴奏曲: *Ayun-ayun* アユン・アユン *pl. nem*)
5. 《新 作》 星流譜——ガムランのための 菅野由弘作曲
6. 《古 典》 *Lobong* ロボン
～*Kinanti* キナンティ
～*Kembang Pepe* クンバン・ペペ *sl. manyura*
7. 《舞 踊》 *Kelana Topeng* クロノ・トベン
(伴奏曲: *Bendrong* ベンドロン～*Liwung* リウオン～

Pucung Rubuh プチョン・ルボ～*Bendrong* ベンドロン～
Eling-eling エリン・エリン～*Sampak* サンパ *pl. lima*)

* 演目解説

芹 澤 薫

星 流 譜

菅野 由弘

〔前略〕

曲は、ガムランの二種類の音階、ベロッグ音階とスレンドロ音階が擦れ合うことによって起こる響き合い、楽器の長い余韻が醸し出す神秘的な色合い、そして同時に存在する異次元のヴァイブレーションを引き出す事を意図している。表に現れた音楽の速度が速くなればなる程、そこに生ずるビートは複雑な大きなうねりになり、より静的なメッセージを送り出す、そんな姿を考えつつ作曲した。

私にとって殆ど未知に近かったガムランの楽器を丁寧に教えて下さった田村史さん、又作曲の過程でいくつかの実験に協力して下さい下さった演奏者の方々に御礼申し上げますと共に、今夜の演奏を心から楽しみにしている。この作品を東京芸術大学百周年記念演奏会の為に作曲出来た事、それがこの懐かしい奏楽堂で演奏される事を、大変幸せに思う。

* ジャワ舞踊

田 村 史

東京芸術大学創立100周年記念ガムラン特別演奏会出演者・スタッフ

● 出 演	佐々木 真理子	学 生
卒業生	白 井 真由美	遠 藤 和 宏
井 上 恵 理	芹 澤 薫	小 林 恵理子
植 村 幸 生	福 沢 達 郎	斉 藤 恒 芳
柿 沼 唯	皆 川 厚 一	土 井 康 司
木 村 佳 代	森 重 行 敏	中 村 仁 美
鴻 巣 香	山 田 敦 子	中 村 美 郁

名 取 太 郎
馬 場 信 子
福 岡 正 太
藤 田 育 子
松 井 美 千 子
矢 野 加 奈 子
山 口 恭 子
山 本 百 合 子
山 本 陽 子

●特別出演——

サプトノ
ムロヨウイドド
サストロトゥギ
ヨ
マリディ
トゥティ・ウィ
ナルティ

●賛助出演——

大 島 俊 作
佐々木 美奈子
前 田 弥 生
宮 脇 香 里
田 村 史

●企画・制作 ガム
ラン特別演奏会実
行委員会

田 邊 史 郎
芹 澤 薫
山 田 敦 子
福 岡 正 太
中 村 仁 美
中 村 美 郁
土 井 康 司

●監 督——

田 村 史

●監 修——

柘 植 元 一

●協 力——

ISI (Institut
Seni Indonesia
di Yogyakarta
ヨグヤカルタ国
立芸術大学)

ガムラングルー
プ「ランバンサ
リ」

芸大ガムランク
ラブ

タリジャワ

インターミュー
ジック

Ionisation for Percussion Ensemble of 13 Players

.....E. VARÈSE

Percussions: 有 賀 誠 門* 野中美千代 田 邊 由 紀 鈴 木 優 子
遠 山 恭 子 鷹羽香緒里 梅津千恵子 藤 田 浩 司
松 野 亜 紀 西 川 圭 子 宮 崎 仁 北 上 あ や 子
和 田 光 世

シャンソネリー

バルボトゥー編

Chansonnerie pour quintette de cuivre

.....Arrangement de G. BARBOTEU

Trumpets: 杉 木 峯 夫* 島 田 俊 雄 Horn: 守 山 光 三*

Trombone: 伊 藤 清* Tuba: 伊 藤 忍

13管楽器の為のグラン・パルティータ より モーツァルト

From “Serenade” No. 10 in B^b-major, K. 361

(Gran Partita).....W. A. MOZART

Conductor: 金 昌 国*

I. Largo-Allegro molto

Oboes: 渡 辺 克 也 松 岡 裕 雅

V. Romanze

Clarinets: 村 井 祐 児* 三 界 秀 実

Adagio-Allegretto-

Bassethorns: 那 須 ち か 河 端 秀 樹

Adagio-Coda

Bassoons: 岡 本 正 之 山 浦 正 宏

VI. Thema mit Variationen

Horns: 守 山 光 三* 奈 良 寿

(Andante)

VII. Rondo. Allegro molto

塚 田 聡 和 田 博 史

Contrabass: 黒 木 岩 寿

——休 憩——

弦楽四重奏曲 第44番 変ロ長調 作品50の1

ハイドン

String Quartet No. 44 in B^b-major, Op. 50-1 J. HAYDN

1st Violin: 寺 岡 有 希 子

2nd Violin: 川 田 知 子

100周年記念演奏会 V (室内楽演奏会)

教官と学生による室内楽の夕べ

1987年10月6日 (火)

旧東京音楽学校奏楽堂

開場●6:00 開演●6:30

主催●東京芸術大学音楽学部

後援●読売新聞社

プログラム

アイオニゼーション

ヴァレーズ

Viola: 中 溝 智 子
Violoncello: 向山佳絵子
アダージョとロンドコンチェルタンテ ヘ長調 シューベルト
Adagio e Rondo concertante D. 487 F. SCHUBERT

Piano: 田 村 宏* Violin: 原田幸一郎*
Viola: 澤 和 樹* Violoncello: 田中雅弘*

セレナーデ 第1番 ニ長調 K.100 より モーツァルト
From "Serenade" No. 1 in D-major, K. 100

.....W. A. MOZART

Conductor: 浅妻文樹*
I. Allegro Oboes: 小島葉子* 鈴木恵子
II. Andante Horns: 千葉 馨* 守山光三*
IV. Allegro Trumpets: 杉木峯夫* 島田俊雄
V. Menuetto 1st Violins: 浦川宜也* 澤 和樹* 日高 毅*
VIII. Allegro 原田幸一郎* 松原勝也 小宮 直
2nd Violins: 田中千香士* 山岡耕筈* 景山 誠治*
瀬戸瑠子* 宮川正雪
Violas: 中塚良昭* 兎東俊之*
百武由紀* 城間千絵
Violoncellos: 堀江泰氏* 三木敬之*
レーヌ・フラショ*
Contrabasses: 江口朝彦* 永島義男*
(*印は教官)

ごあいさつ

東京芸術大学音楽学部は、本年創立100周年を迎え、さまざまな記念の行事を行います。明治以来の近代日本の音楽の歴史に由緒ある奏楽堂で室内楽の演奏会を催すことができるのは大きな喜びであります。その昔、

室内楽は「王侯貴族の広間で演奏される音楽」と定義されていました[1732年のヴァルターの音楽辞典参照]。選び抜かれた奏者が、高い音楽的な趣味を持つ聴き手の前で、技量と洗練を競いあうのが、室内楽でした。その伝統は後の時代にも残り、19世紀以降も、室内楽は音楽としての純粋さ、趣味の洗練、アンサンブルの密度の高さにおいて、たいへん重要な地位を占めています。

東京芸大音楽学部では、昭和39年以来室内楽の定期演奏会を催し、昭和47年には大学院に室内合奏講座〔初代の主任教授、田村 宏〕を設けて、今日に到りました。今回の100周年記念演奏会では、ピアノ及び弦・管・打楽器の教官と学生がこぞって出演し、美しい響きで知られる奏楽堂で、各種の編成による室内楽の饗宴を繰り広げます。ご来聴の皆様にもお楽しみいただければ幸いに思います。なお、この機会を借りて、旧奏楽堂の再建保存に手を差し延べられ、今回、芸大100周年の記念行事に快くお貸し下さる台東区のご厚意に、心から御礼申し上げます。

東京芸術大学音楽学部長 服 部 幸 三

100周年記念演奏会Ⅵ（オペラ公演）

1987年10月9日(金)・10日(土)・11日(日)・12日(月)

旧東京音楽学校奏楽堂

開場●6:00 開演●6:30

主催●東京芸術大学音楽学部

後援●読売新聞社

ごあいさつ

東京芸術大学音楽学部長 服 部 幸 三

東京芸術大学音楽学部は、本年創立100周年を迎え、さまざまな記念の行事を行います。その中でも特にご注目をいただいているのが、グルック作曲のオペラ《オルフェオとエウリディーチェ》(1762)の旧東京音楽学

校奏楽堂における再演であります。明治36(1903)年に、後に「蝶々夫人」を歌って世界的に有名になった三浦環(当時は柴田姓)が、百合姫(エウリディーチェ)の役を歌いました。東京芸術大学の付属図書館には、初演の時の台本が伝わっていますが、「など拒絶(いな)みやする。妻の為とあらば…」といった調子の難しい文語調です。ピアノを弾いたのは、当時東京大学に招かれ、音楽学校でも教えていた哲学者そしてピアニストのケーベル博士でした。舞台の背景の書割は、明治画壇の巨匠藤島武二が筆をとりました。藤島画伯はヨーロッパ風の地獄の場面を描くの、イメージが掴みにくくて苦労したと言われています。

84年をへた今日、私達はただ、わが国ではじめて上演されたオペラを昔の姿そのままに再現しようというわけではありません。「愛」と「死」と「歌の力」、この三つのモチーフに支えられた格調高い名作オペラに、初演の時に思いをはせつつ、芸大100周年を飾るにふさわしい新しい生命を吹き込みたいと願っています。なお、この機会を借りて、旧奏楽堂の再建保存に手を差し延べられ、今回、芸大100周年の記念行事に快くお貸し下さる台東区のご厚意に、心から御礼申し上げます。

オルフェオとエウリディーチェ

CH. W. グルック作曲

訳詞: 中山悌一 補訳: 三林輝夫

ORFEO ED EURIDICE

composed by CH. W. GLUCK

(in JAPANESE, translated by TEIICHI NAKAYAMA and TERUO SANBAYASHI)

音楽監督, 指揮 山田 一雄 演出 三谷 礼二

装置 三宅 景子	音楽監督補, 副指揮 遠藤 雅古
衣裳 渡辺 園子	合唱指揮 江上 孝則
照明 高沢 立生	チエンパロ 宮松 重紀
振付 石田 種生	コーチ 遠藤 佳世子

舞台監督 加藤 三季夫

演出助手 国松 真知子

舞台監督助手 近江 養

〃 大島 尚志

出演: 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部及び声楽科教官

〃 大学院音楽研究科オペラ専攻生

合唱: 東京芸術大学音楽学部大学院音楽研究科オペラ専攻生

〃 声楽科3年生有志

バレエ: 東京シティバレエ団

管弦楽: 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

キャスト

(A)

(B)

オルフェオ Orfeo	木村 宏子	伊原 直子
エウリディーチェ Euridice	大沼 美恵子	浅田 啓子
アモーレ Amore	西野 薫	斉田 正子

10月9日(A) 10日(B) 11日(A) 12日(B)

出演者

合唱

ソプラノ	アルト	テノール	バス
吉田 ゆかり	工藤 千波留	田中 孝男	妻屋 秀和
大屋 省子	坂本 朱	井上 幸一	浦野 智行
小渡 恵利子	松永 恵三子	磯部 哲夫	東 卓治
謝花 美也子	竹之内 睦子	藤森 秀則	久保 和範
花岡 久子	久保田 尚子	馬場 正晃	上野 正人
平尾 ゆう子		平田 孝二	坂寄 和臣

バレエ(東京シティバレエ団)

女性舞踊手	男性舞踊手
吉沢 真知子	北條 耕男

長谷川 祐 子	青 田 しげる
渡 辺 恵	吉 田 守
池 辺 美 香	山 本 秀 典

* CH. W. グルック作曲「オルフェオとエウリディーチェ」

佐川 吉男

本邦初上演オペラ 84年ぶりやっと再演

10月、ゆかりの奏楽堂で 東京芸大創立
100周年記念

わが国で初めて上演されたオペラ、グルック作曲「オルフェオとエウリディーチェ」が、初演場所の東京芸大旧奏楽堂で、今秋、八十四年ぶりに再演されることになった。今年、創立百周年を迎える東京芸大の記念演奏会の一環だが、初演のあと文部省から「男女が合同で演ずる歌劇は風紀上、好ましくない」と、再演が中止された歴史もあり、音楽関係者はこの百年の流れに改めて感慨を深めている。

このオペラは明治三十六年（一九〇三）、ドイツから外国人教師として東京音楽学校（現、東京芸大）に招へいされていたケーベル博士の指導の下に、後に世界的な「蝶々夫人」となったソプラノの三浦環（当時、柴田環）ら、同校生徒、卒業生らが初演した。エウリディーチェは「百合姫」とされ、会話も文語調。背景の書割は洋画の巨匠、藤島武二が描くなど、当時の日本芸術界の総力を結集した豪華版。「音楽新報」創刊号に、「舞台の光景初めて観者の眼に映せし時、誰かは心の躍然たるときめきを覚えざりけん」と称賛されたが、夜間に青年男女が会して恋の劇を演じるのは穏やかでない、と文部省から再演に待ったがかかった。

当時は、官立の音楽学校が必要か、と東京音楽学校廃止論も起こり、帝国議会でも「音楽とは一体何か。知育、徳育、体育のどれに属するのか」と論じられたころ。以後、オペラの土壌が育たず、昭和三十一年に「椿姫」が上演されるまで五十六年間、芸大では一度もオペラは上演されな

った。わが国の洋楽百年の中で、オペラだけがいまだに定着しない状況を作り出す遠因にもなった。

老朽化で取り壊し寸前だったわが国最初の音楽ホール「奏楽堂」が、地元・台東区の手でこのほど上野公園内に移築、復元された。そのゆかりの舞台で八十余年ぶりの再演となった。

五月三十日スタートの百周年記念演奏会シリーズ中、最大の目玉として、十月九日から四日間、伊原直子、木村宏子らOBの歌手と、学生が協演する。

服部幸三・同大音楽学部長は「先人の情熱を今一度振り返ってほしい」と話している。

（梅津 時比古記者）

〔原資料縦組〕

（『毎日新聞』昭和62年5月12日）

情念を前面に 東京芸大百周年記念
「オルフェオと…」

この秋は東京芸術大学が創立百周年を迎え、美術・音楽両学部で多彩な記念事業を行っている。その中で特に注目されるのが、九日から十四日にわたって、今回移築復元となった旧東京音楽学校奏楽堂でのオペラ公演、グルックの「オルフェオとエウリディーチェ」である。一九〇三年（明治三十六）七月、この奏楽堂で日本人による最初のオペラ公演がなされた。もっとも指揮はノエル・ペリー、ピアノはケーベル博士ではあったが、歌唱は柴田環（三浦）ほか全員日本人であり、訳詞（石倉小三郎他）上演である。山本芳翠、藤島武二らによる背景も評判を呼んだが、演奏面も高い評価を受けたようだ。これほどの公演が再演を阻まれ、以後戦後に至るまでオペラ上演に対し官学が背を向けなければならなかった事情については記す余裕はないが、“男女が手を執り合って接吻の真似をする如き”学習は、到底世情の許すところではなかった時代である。八十四年という時を経て、今日この奏楽堂で日本オペラ演奏史の原点となったこの作品が蘇演されたのは、その年月の重さをひしと感じさせる意義深い公演だった。山田一雄指揮、三谷礼二演出、歌手側は木村宏子、伊原直子のオルフェオ、

大沼美恵子、浅田啓子のエウリディーチェほかで、三谷は全く劇場機能をもっていないこの舞台で、鏡面仕立ての数枚のパネルを可動的に用い、空間設定、時間的推移を鮮やかに形象し得ていた。筆者の出かけたのは伊原の組だったが、古典のかたちの中から、グルックのオペラ改革情熱を感じさせる劇的演出で全篇(ぜんぺん)を貫き、ロマン派的情念を前面に出した“人間劇”をつくり上げていた(12日所見)。(畑中 良輔・音楽評論家)

〔原資料縦組〕

(『朝日新聞』昭和62年10月17日)

いま一つ工夫がほしい

東京芸大創立100周年記念オペラ公演

「オルフェオとエウリディーチェ」

創立百周年を迎えた東京芸術大学音楽学部の特設事業のひとつであるオペラ公演グルックの「オルフェオとエウリディーチェ」を上野公園内に再建された「旧東京音楽学校奏楽堂」で聴いた。

グルックのこのオペラは、ノエル・ペリーとケーベル博士の指導にはよるが、柴田(三浦)環の百合姫(エウリディーチェ)をはじめ歌・訳詞・舞台美術まで日本人の手によって日本最初の本格的オペラ上演でとりあげられたという作品である。この日本のオペラ事始めにあたる上演は明治三十六年、この奏楽堂を舞台に東音有志を中心に行われている。今回の記念公演にこの作品が選ばれたのは、オペラ事始めにかかわるこうした歴史的意識が当然ながら働いたからであろう。

今回も日本語上演(訳詞中山悌一、補訳三林輝夫)で、音楽監督・指揮が山田一雄、演出が三谷礼二、キャストはダブルで、筆者が聴いたA組は木村宏子、大沼美恵子、西野薫の面々だった。三谷の演出は、時には墓に、時には冥界と現実世界の間の扉のように、或いは心理の襞を映す鏡のようにもなる大きなマジックミラーを幾枚も舞台にもち込んだところが特色。ジャン・コクトーの映画でも鏡は重要な役割を果たすが、狭く飾りけのない今回の舞台では、奥ゆきを作り出す以外にも実に様々な効果があっ

た。しかし人間の動かし方自体は、「精霊の踊り」のバレエを除いてやや平板なメルヒェン調。もう少し三谷演出らしい毒のあるところが欲しかった。山田の音楽は熱演であったが、舞台の方向に沿っていえばロマンチックでありすぎた。歌唱陣では、地味ではあったがオルフェオの木村が、安定した声と言葉で納得できるものを示した。

全般的には、現在の芸大オペラの水準を味味なくだしたといえるものと思うが、同時にこの作品の魅力的な部分も退屈な部分も、そのまま表現されているようでもあった。

上演の意図に事始めの歴史的意義があったとするなら、上演内容にも今ひとつ工夫があってもよかったのではないか。明治三十六年の上演の復元は不可能としても、学術的検証を加えて十八世紀オペラの原像に迫る等の意欲があってもよかったかもしれない。(10月9日、旧東音楽奏楽堂)

石田 一志

〔原資料縦組〕

(『週刊オン・ステージ新聞』昭和62年10月23日)

東京芸術大学公演《オルフェオとエウリディーチェ》

東京芸術大学創立百周年記念として、大学ではさまざまなイベントが催されているが、移築復元された旧東京音楽学校奏楽堂ではグルック《オルフェオとエウリディーチェ》が公演された。このオペラは周知のように、1903年7月23日、この奏楽堂で日本人の手で本格的な上演を果たした作品である。のちの世界的ソプラノ三浦環などが歌った。漸くみえたオペラのきざしが、紅白粉塗ってのオペラなど官立ではまかりならぬと文部省とやらの禁止で、以来40余年目をつぶらなければならなかったと知ると、いまなお、官僚の無知蒙昧さに腹が立つ。が、記念すべき公演は、まことに見事で意義の深い舞台となった。配役はダブルで組まれ、オルフェオは木村宏子、伊原直子の当代きっての名メゾふたり。伊原組での所見だが、三谷礼二演出、山田一雄指揮、歌手の演唱加わって、冒頭から激しく情念を噴出させた。グルックの作品、たしかに神話オペラながら、人間オルフェ

オとエウリディーチェと思えば激情逆巻くものがある。それを演出・演奏ともに明確にイメージした。また、三谷演出はミラーパネルを巧妙に操り、空間を拡張し時を移し、背後の世界をも透視させた。10月12日・旧東京音校奏楽堂

●小山晃

〔原資料縦組〕

〔『音楽の友』第45巻12号，昭和62年12月，228頁〕

芸大百年，奏楽堂で《百合姫》再演

昭和六十二年秋，私はNHK『ETV8』で、『奏楽堂物語・東京芸術大学百年』という番組を企画制作した。放送は十一月三十日。さいわい教育テレビとしては，ご覧になった方も多く，番組の反響はまずまずであった。今回は，それにまつわる話である。

東京芸大や旧東京音楽学校の出身者にとって，奏楽堂はそれぞれの青春を賭けた熱っぽい空間であり，彼らの音楽の出発点であって，単なる懐古的な建物以上の存在であった。

この奏楽堂が出来たのは明治二十三年。左右両翼の教室をしたがえた木造・美麗な建物は，建築学からみても貴重なものだった。客席三百八十の小ホールは，当時としては珍しく，床が階段状に傾斜していた。天井は一部，ヴォールト状（かまぼこ状）に持ち上がり，その下に水平に太い陸梁（りくばう）がみえ，壁の四隅は曲線，その壁や床の内部には藁やおがくずがつめられるなど，音響上その他のさまざまな工夫が随所に施されていた。

かつては日本の代表的音楽ホールとされ，学外にまで名声を誇った奏楽堂も，昭和三十年代以降，急速に老朽化がすすんだ。移築保存の方向が打ち出されたのが昭和四十四年，そして昭和五十年代にはいと，現地保存の声があがった。

構内に新しい音楽ホールを建てたい学校当事者は，奏楽堂の愛知県犬山の明治村移築を強く望み，生きた文化財のあり方を問う一部教官や卒業生有志は，学内保存を主張して，両者の意見は真っ向から対立した。

その対立が続くなか，台東区長の内山栄一氏が登場し，奏楽堂を台東区

内に受け入れよう，と申し出る。打開の道がひらけた。その後，紆余曲折（うよよくせつ）はあったものの，東京都の理解もあり，奏楽堂はようやく上野公園内，それも大学の目と鼻の先の，もと都美術館あと地に移ることになったのである。

続けて，奏楽堂のこわれたオルガンを修理してよみがえらせようという市民運動が起こった。文化財保存についての理解の輪は次第にひろがっていった。

ともあれ，昭和四十年代なかばから昭和六十二年までの奏楽堂をめぐる動きは，さまざまな文化財問題の側面を浮かび上がらせて興味深い（なお，見事なケース・スタディとしての，この奏楽堂保存をめぐる経緯は，『上野奏楽堂物語』～東京新聞出版局刊～にくわしい）。

その奏楽堂は，昭和五十九年夏の解体工事開始から，三年たった昭和六十二年春に移築が完了，秋にはパイプ・オルガンも無事，修復，完成した。

折しも昭和六十二年は，東京芸大創立百年。音楽学部は多彩な記念行事を開催した。その中で，私がかつとも注目したのは，奏楽堂で再演するグルックの歌劇《オルフェオとエウリディーチェ（オルフォイス）》であった。

というのは，日本人の手ではじめて上演した本格的な名作オペラがこの作品であった。明治三十六年七月二十三日，奏楽堂のステージにおいて，のちに《蝶々夫人》で世界的に知られた三浦環（当時，柴田姓）ほか東京音楽学校の卒業生，生徒有志が出演し，舞台背景は藤島武二らが描くといった，いわば芸術界の総力を結集した上演が行なわれた。エウリディーチェを《百合姫》と訳し，全体の歌詞を典雅な文語調としたのは，さすがに時代の趣味をうかがわせる。それから数えて八十四年……。私は，奏楽堂と芸大百年を重ね合わせる番組をつくるとすれば，その構成の核は《百合姫》再演だ，と直感した。

番組のねらいが決まり，私は動き出した。もちろん『ETV8』四十五分の番組を構成するには，さまざまな素材が必要になってくる。その点，今回の制作では，多方面からの助けを借りることが出来，しあわせだった。

奏楽堂保存問題の大詰めから解体工事までの記録は，NHK番組『永遠に響け～洋楽のシンボル・奏楽堂』（構成・谷尾裏，昭和六十一年一月十

九日放送)の映像に負うところが多く、その後のオルガン修理や移築完工式、春からの芸大記念工事については、同僚たちの先行取材があった。また実際の取材にあたっては、芸大事務局ほか関係者に随分、お世話になった。芸大教官で(当時)美術史家の若桑みどりさんが、わざわざ放送センターまで、分厚い芸大百年資料と小泉文夫コレクションのメモを届けて下さったのも嬉しく、制作のスタートにはずみがついた。

はずみがついたといえば、奏楽堂でのグルックのオペラ再演の取材でこういうこともあった。

数日後のテレビ収録の下見をかねて、私は十月九日、初日の夜に奏楽堂に出かけた。客席は来賓・招待客でにぎわしく、ステージも指揮者の熱演や鏡を使った新演出で、単なる懐古的な再演ではないという姿勢が示されていた。私は関係者との打ち合わせをすませてから外に出た。

初秋の夜の空気は、少しほった頬に心地よく、暗い木立に囲まれた公園の小道をひとり歩きながら、私はつい今しがた見た、グルックのオペラの意味について考えた。

いうまでもなくオルフェオの主題は、妻エウリディーチェに逢うべく黄泉の国に下ったオルフェオが、歌の力、愛の力によってアモールの心を動かし、愛の成就を得るというものだ。その題材は、十六世紀の末、フィレンツェでオペラが始まって以来、くり返し作曲家がとり上げている。モンテヴェルディやグルックの名作ばかりでない。オッフェンバックのパロディの傑作まである。それほど、この主題は人々から親しまれているのだ。

思えば、人それぞれにかけがえのない大切なものがあるはず。その大切なものの命をよみがえらせるのは、愛の強さだけでなく、音楽の持つ力が必要とされる。このこと実は、音楽家に限らず、私たちすべての人間にとって重要なことではないだろうか。

奏楽堂をめぐるあれほど意見が対立し、問題が壁にぶつかって膠着状態に陥ったにもかかわらず、関係者の予想をこえた良い方向で解決した。このことは当事者のすべてが、この間ずっと、音楽への愛を失わずにきたからではないか。数年前までの、あの無残な姿の奏楽堂が蘇った。音楽へ

の愛と信頼がこの奇蹟を生んだのではないか。私には、そんな風に見えてきた……。

上野の駅に近づいたとき、私は、すぐ目の前を音楽評論家の増井敬二さんと三善清達さんの歩く姿に気づいた。お二人とも、もとNHKの先輩、厳しかった分、それだけ今は親しみもわく。「のどが渴いていませんか」と声をかけて、駅の二階のビア・レストランに誘った。たまたま入り口に、これまた大先輩の福原信夫さんもおられて、思いもかけぬNHK四人組の出会いとなった。当然、芸大百年、奏楽堂、そして当夜のグルック再演の話に花が咲く。

それにしても、オペラ放送の大ベテランがよくまあ三人も揃ってしまったものだ。福原さんはNHKが招いたイタリア・オペラの最初からのプロデューサーであり、増井さんは名著『日本のオペラ』で、明治・大正のオペラ上演史を徹底的に調べ上げた人。そして三善さんは、昭和三十五年ごろ、『洋楽事始め』『日本のオペラ』『日本楽壇の諸問題』などの特集番組を相次いで企画し、制作した人でもある。新人の私は、これらの特集制作の仲間に入れて頂き、とにかくたいへんな勉強になった。

昭和三十五年ごろといえば、日本の洋楽の夜明けを知っている人が、何人もご存命であった。私の古い番組制作ノートには、例の明治三十六年の《オルフォイス》の関係者インタビューとして訳詞の石倉小三郎さん、合唱に出演の声楽家、鈴木のおさんの名が記されている。

むかし、徹夜などして番組を作った共感もあって、三善さんが言ってくれた。

「ヨーロッパのオペラ史の節目には、オルフェオが必ず出てくる。日本のオペラのはじまりもオルフェオだ。今夜、きみが感激するのも無理はない。さあ、ビールをもう一杯どうだ……」

この夜、私は、いろいろな意味で元気づけられたのである。

さて、『奏楽堂物語』では、ほかにも印象に残ったことがいくつもある。オルガンをよみがえらせよう、という市民運動の取材では、谷中の寿司屋のご主人、野池幸三さんを訪ねた。野池さんは、なれた手つきで鮓を握

りながら、「芸大の先生がたと一緒にやったのは、いい思い出だね。こういう文化財というものは、当人同士が守るんじゃないかって、やっぱり町のもの全体が守るってことがいいことじゃないのかね」と語った。

奏楽堂保存については、問題が長びいた分、理解の輪がひろがったともいえる。その奏楽堂は狭い学校構内を出て、しかも上野を離れることなく、台東区の音楽ホールとして一般市民に開放された。

秋も深まり、文化財審議会は、国の重要文化財指定の答申をした。

上野の森の中、晩秋の日ざしを浴びて立つ奏楽堂。番組の終了部分、私は、至福の時をあらわす〈精霊のおどり〉の音楽をバックに流しながら、その奏楽堂の新しい旅立ちを祝福するコメントで結んだ。〔原資料縦組〕

(大塚修造『ON BOOKS 90 ただいま放送中』音楽之友社, 1991年, 246～253頁。初出は『レッスンの友』第26巻3号, 昭和63年3月, 33～35頁)

伊沢修二先生記念祭

東京音楽学校(現東京芸術大学)初代校長

伊沢修二先生記念祭

昭和62年11月

伊沢修二先生記念祭実行委員会

後援団体

長野県教育委員会, 長野県町村会, 上伊那地域広域行政事務組合, 上伊那教育会, 上伊那市町村教育委員会連絡協議会, 朝日新聞社, 読売新聞社, 毎日新聞社, 中日新聞社, 信濃毎日新聞社, 高遠新聞社, 高遠日報, NHK長野放送局, 信越放送株式会社, 株式会社長野放送, 株式会社テレビ信州

* ごあいさつ 伊沢修二先生記念事業名誉会長 長野県知事 吉村午良
伊沢修二先生記念事業会長 高遠町長 北原三平
東京芸術大学音楽学部長 服部幸三

祖父修二の心底

伊澤甲子磨

祖父修二は私が生まれるよりずっと以前に世を去っていたから、修二については直接、何も知らない。

それ故、修二は私にとって祖父と言うより歴史上の敬愛する人物といった感が強いのである。修二は多才な人で教育行政家、音楽家、理工系の技術者、そして政治家としても活躍したが私は彼の本質はアジア独立革命の志士であったと思う。修二が生きた時代は日本を除くアジアに於ける有色人種の人々は欧米の白人たちの侵略と搾取にしいたげられ泣かされていたのである。これらの人々に自由と独立を得させたいとする悲願に燃えて一筋に前進したのが彼の生涯であった。

それ故、彼が心を許した人物は明治29年1月3日、台湾で暴動発生の際、悲壮な最期を遂げた吉田松陰の甥、榊取道明であり又は西郷隆盛の志を継ぎ大アジア復興の夢に身命をなげうって戦い続けた宮崎滔天であり或いは欧米追従の風潮に抗して東洋の学を講じ広大無辺のアジアの精神を護持した根本通明(ケーベル博士から真の日本人と賞賛された東洋哲学者)等であった。

アジアを愛した修二は若き日、アメリカに留学したが其の後、二度と欧米諸国を訪ねることはしなかったが中国大陆に単身乗り込み此の地の言語障害に苦しむ人々を救わんものと吃音矯正に挺身したり又は日中文化交流を深めんため世界初の日中辞典たる日清字音鑑を著わし更に其の後、日本、韓国、中国の3ヶ国語の辞典、日、韓、清字音鑑を著わしたのであった。

伊沢修二といえは音楽の功績のみが語られ勝ちだが実は彼は反権力、反体制の国士であり昭和45年に自決して果てた私の盟友三島由紀夫に通じる人物と断すべきで、此の点を忘れては修二なるものを正しく理解することは不可能であろう。

記念演奏および記念講演会プログラム

昭和62年11月1日 高遠町民体育館にて

1. 開会のことば 教育委員長 中原英太郎

2. 会長あいさつ 町長 北原三平

3. 講演「伊沢修二先生を偲んで」 服部幸三

4. 小学生合唱（伊沢修二作曲の唱歌による）

高遠小学校5年東組 沖村幸子先生

指導 山本文茂

(1) 入場行進「まなべ」

(2) 唱歌授業「子供子供」

(3) 伊沢作品のパートナー・ソングと器楽合奏

歌「かり」「あふぎみよ」 笛「紀元節」

(4) 退場行進「5年東組の歌」（山本文茂作曲）

5. メゾ・ソプラノ独唱 青山恵子 伴奏 前島あや子

荒城の月（滝 廉太郎）待ちぼうけ この道 あわて床屋

（以上 山田耕筰）

アンコール：伊那（北原白秋作詞，平井康三郎作曲）

——休憩——

6. オーケストラ伴奏による町歌斉唱（遠藤雅古指揮）

7. オーケストラ演奏 遠藤雅古指揮，Fl 大沢明子

(1) ベートーヴェン〈交響曲第一番〉

(2) グルック「オルフェオ」から〈精霊の踊り〉

アンコール：シューベルト〈ロザムンデ〉第三幕間奏曲

最後にもう一度，オーケストラ伴奏で一同で町歌を歌う。

8. 閉会のことば 教育委員長

伊沢修二先生を偲んで

昭和62年11月1日（日）午後2時 高遠町民体育館における講演

東京芸術大学音楽学部長 服部 幸三

今日，ここで伊沢修二先生を偲ぶお話ができますことは，たいへん嬉しいことであります。私はただいま東京芸術大学の音楽学部長をいたしておりますが，昔風に言えば，東京音楽学校の校長に当たります。東京芸術大学というところは，第二次世界大戦が終わったあとに，東京音楽学校と東京美術学校が手を取り合って一つの大学になったのですが，その時，東京音楽学校は音楽学部になり，音楽学校長は音楽学部長になりました。伊沢修二先生は，東京音楽学校が一番最初の校長でした。ですから，私の大先輩に当たります。学校をお始めになったたいへん偉大な先輩伊沢修二先生のことについて，先生のご郷里である高遠町で小学校の皆様にもお聞きいただいて，こうしてお話できるのは，本当に嬉しいことなのです。小学生の皆様にも分かって頂けるように，できるだけ，そのつもりでお話を致します。

伊沢修二先生が，東京音楽学校をお始めになったのは，今からちょうど100年前の明治20年のことでした。その時，伊沢先生は36歳でしたから，もし今生きておられれば，136歳になられるわけです。小学生の皆さんにとっては，おじいさんのまたおじいさんぐらいの年に当たります。小学生の皆さん方の中には，昔はこうだったよ，というお話をおじいさんから聞いたことのある人がたくさんいるでしょう。半分ウソのように思えることさえありますね。でもおじいさんの言うことだから，本当だろう，と思うでしょう。ところが，おじいさんのまたおじいさんのお話となると，じかに聞いた人は誰もいません。伊沢先生の時代というのは，どんな時代だったのでしょうか。さいわい，伊沢先生は60歳になられた時に，自分はこんな具合にやってきたのだ，と生涯を振り返って，書物をお書きになりました。その中に，本当にそんなこともあったのか，とビックリするようなことが書いてあります。

伊沢先生が，音楽学校の開設に先立って，音楽取調掛のお仕事をしておられた頃のお話です。先生は文部省のお役人も兼ねていらっしゃったの

で、時々日本中の村や町でちゃんとした授業をやっているかどうか、視察に出掛けられました。明治15年、先生が32歳のときのことです。先生は和歌山県の熊野の地方の奥にある畑村というところを訪ねたのです。先生の伝記には、こんな具合に書いてあります。

「今でも覚えているが畑村というところに行ってみたら、それはたいへんな山の中で、村中に自然の平らな場所が少しもなく、家を建てるには山の傾斜地を削って、そこに掘って小屋を建てる。村中に床のある家というのはお寺と新築の小学校ぐらいである。普通の民家は全部土間にゴザをしいてその上に寝起きする。家には敷居などというものはなく、2本の木か竹で戸を挟んで立てかけるだけである。食べ物、村中芋を作っている。

私が村を巡視した時には、村中に男は一人もいなかった。だれか男はいないかと訊ねたら、お寺の和尚さまが学校に行っておるから、そこに行ってくださいというのだった。そこで理由を聞くと、『ご覧の通り、この村は芋で生きているのに、近頃猪が出て芋畑を荒らすから、15歳以上の男子は総出で猪狩りに行った』という答えだった。そこで学校に行ってみたが、お寺の和尚さんが子供に本を読ませたり、字を習わせたりしていて、なかなか良くやっていた」。

今では、日本国中どこを探しても、村中でゴハンの代わりに芋を食べているところはありませんし、土間にゴザをしいて寝ているところもありません。男の子が一人残らず猪狩りに出るようなこともありません。でも伊沢先生の時代は、まだそういう時代だったのです。

さて、伊沢先生はこの町でどんな具合にお育ちになったか、振り返ってみましょう。お城に上がって行くと、伊沢先生のお生まれになった家がありますね。前に石碑が立っています。伊沢先生は、今から136年前の嘉永4年に、高遠藩の武士の家にお生まれになりました。お生まれになった家を見れば分かるように、けっして豊かな暮らしではありませんでしたが、一家の中には、学問の血筋が流れていました。先生は高遠で勉強しながら18歳まで過ごしました。それは徳川時代の最後から明治の初めにかけてのことでした。まだ世の中に、小学校や中学校はありません。ただ幸いなこ

とに、先生が九つの年に、今も公園の中にある進徳館という藩校、つまり高遠藩の学校が出来たのです。伊沢先生は進徳館で熱心に勉強して、仲間から「理八小僧」というあだ名をもらいました。「理屈の多い八ちゃん」というような意味で、八は数字の八ですが、伊沢先生は小さいころの名前を八弥と言ったのです。「理屈の多い八ちゃん」は、たとえ自分が教えを受けている先生が言われることでも、理屈に合わないことがあると理詰めでがんばりました。喧嘩はいつも弱い方に味方したそうです。15歳の年に、伊沢先生は進徳館の寮長、つまり寄宿舎に籍を置いて勉強する人々を取り締まる生徒総代になりました。その頃の藩の学校の勉強というと日本語の読み書き、中国の漢文などが中心でしたが、進徳館では西洋の本も勉強しなさい、そして勉強したことは実際に役に立つようにしなさい、と教えていました。そのお手本だったのが、伊沢先生で、当時手に入る限りの西洋の学問の書物を日本語に翻訳された形で読みました。先生はとくに理科に興味があったようです。そして、松の木の根っこを蒸留してガス灯をともしたり、ハゼの木の蠟と油とカセイソーダを混ぜ合わせて沸騰させて、石鹼を作ったりしたそうです。私だったら、お恥ずかしいことですが、まず何を考えるかということ、下手な実験は危ないじゃないか、他の人がやるのを見て大丈夫と確かめてから、私もやろう、と思います。でも、伊沢先生はそうではありません。書物を見ただけで、自分で先頭に立っておやりになったのです。やがて、18の年に伊沢先生は5日半の道のりを歩いて東京に出ました。そして19の年に、今日の東京大学に当たる大学南校に高遠藩の推薦を受けて入学されたのです。

伊沢先生の生涯にとってたいへん大きな出来事は、24歳から27歳まで3年間アメリカ合衆国に留学なされたことでした。先生はアメリカの東海岸の方にあるマサチューセッツ州のブリッジウォーター師範学校とハーヴァード大学で勉強しました。人一倍勉強熱心で、負けん気も強い伊沢先生でしたから、ご自分でも言うておられるように、アメリカの学生たちとくらべても簡単にはひけを取らず、たいがいの課目は中以上の成績でした。ところが、それでは話がうまく行き過ぎます。伊沢先生にも、実は本当に困

ったことが二つあったのです。しかも、あとで振り返ってみると、そのとき本当に困ったことが、伊沢先生が教育の道で自分を生かす、大切な足がかりになりました。スルスルと行くことばかりが、よいことではありません。本当に困ったときに、道が開ける、伊沢先生の生涯は、そのことを物語っています。ですから、伊沢先生がアメリカに留学して何に本当に困ったのか、その結果どうなったのか、について、少し詳しくお話ししましょう。

第一に伊沢先生が困ったこと、それは英語の発音でした。ご自分でお書きになった伝記の中でこう言っておられます。「私は外国語を18の年から始めた。初めはオランダ語を勉強し、それからオランダ語を下地にした英語の先生に習ったから、随分ヒネクレタ英語でやって来たので、中々向こうの人に分かるように話すことができなかった」。無理ありません。外国で暮らしながら、思うように話が出来ず、分かってもらえないのは、さぞ辛いことだったでしょう。ところが、その悩みを解決してくれる人が現れます。グラハム・ベルという人でした。どこかで聞いた名前だ、と思われるかも知れませんが、ベルという人は、父親の代から言葉の不自由な人に正しい発音を教える方法を研究して、実際にその仕事に携わっていました。伊沢先生はベル氏のところへ行こうと言いました。「私は英語の発音がたいへん悪いから、ぜひどうか正しくして頂きたい。例えば、あなたは言葉の不自由な人(啞)にさえものを言わせるそうだから、たとえ極東に生まれた私でも、あなたに学んだなら、きっと正しい発音ができると思う。ぜひ教えてください」。するとベル氏はどう答えたのでしょうか。伊沢先生の伝記によりますと、ベル氏はたいへん喜んで、「私は今やりかけている仕事があるけれども、あなたのために特別に英語の発音を教えよう。そしてあなたからは日本語を学びましょう」と言ってくれたのです。では、ベル氏がやりかけていた仕事はというと、それは電話機の発明でした。伊沢先生がお書きになっているところによると、ベル氏はたいへん研究に熱心で、時には1週間に1日も眠らないようなことさえありましたが、とてもピアノが上手で、疲れるとピアノを弾き、そうすると疲れが直ったのだそうです。そんな具合に一生懸命発明に当たられて、伊沢先生がお習

いしている間に、とうとう話が通じる第一号機が出来ました。そして世界で最初に電話で話をしたのは、実はベル氏と伊沢先生で、それも日本語だった、ということです。伊沢先生の文章は少し古いのですが、伝記の中から、そここのところを、そのまま読んでみましょう。「かような勤勉の結果として、余が従学する間にともかく話が通ずる一機械を発明し得、余と氏との間に於いて、我日本語が第一の声として送話された」。ところで、ベル氏から習った発音を正しくする方法、詳しく言いますと、口の形と呼吸の整え方を教え、言葉の不自由な人にも言葉を語らせるという方法は、伊沢先生にとっては、その後たいへん大切な宝物になりました。というのは、伊沢先生はその方法を日本語に合うようにさらに研究を深め、吃りを直したり、なまりを直したり、言葉の不自由な人が話せるようにしたり、つまり言葉で苦勞する人たちを助けるためにお使いになったのです。特に吃りを直すことについては、全国的な組織を作り(楽石社)、伊沢先生がお亡くなりになるまでに約5000人もの人が恩恵を受けました。

さて、第二に伊沢先生が本当にお困りになったのは、「音楽」でした。伊沢先生はブリッジウォーター師範学校での思い出を、こう語っておられます。私の経歴を知っている人は、——というのは、伊沢先生は東京音楽学校を始められた方なのですから——あの人は音楽は一番得意だったに違いない、と思うだろう。ところがそうではない。では、そうではなくて、いったいどうだったのでしょうか。そこが肝心のところですから、言葉が古くて分かりにくいところをほんのちょっと直すだけで、伊沢先生が書いておられることを、そのままご紹介しましょう。

「従来私の経歴を読んだ人は、伊沢は音楽においては最も得意であつたろうと想像するであろうが、事實は全くそれと正反対で、音譜などが殆どものにならず、ヒー・フーだけは良いが、ミーとなりヨオとなれば皆上がり過ぎて、先生にも叱られ自分はお種々に苦心したけれども、それでも殆ど唱歌にならなかった。そこで、ある時校長は私を招き、『君はどうも唱歌ができないそうだが、実に無理もない。君は極東の日本人であって、あなたの国の音律はわがアメリカのとは違っておる。だから、君だけに

今後唱歌を免除してあげるから、安心せよ』と言った。私は同情深く〈免除〉という言葉に対して、却って非常に残念に思った。もちろん校長の気持ちは有り難いのであるが、いったい私が政府から選ばれて遥々ここまで留学に来た以上、充分に全部を学んで帰らなければ面目が立たぬ、どうして唱歌だけは出来ぬからなどと〈免除〉というような中途半端な修行で国に帰れるものかと、実に3日ばかりは泣いて悲しんだのであった。

お分かりでしょうか。伊沢君、君は他のことは人並みにできるが、音楽だけは、どうもダメだなー。やらなくていいよ。特別に卒業させてあげるから……。校長先生にそう言ってもらって、悔し泣きに3日3晩泣いた、というのです。私など、勉強ができないからと、悔しい思いをしたことはありますが、正直に言って、3日も泣いたことはありませんので、よく分かるようで、よく分からない。まあ、伊沢先生はそういう方だったのです。

さて、伊沢先生の言葉ですが、ヒー・フーまではよいが、ミーとなりヨオとなれば皆上がり過ぎてもうダメだ、というのは、今日風にいえば、ドレミのドレまでは良いけれどもミファになるともう音が狂ってしまう、ということです。それでは、誰かに特別に習わなければなりません。幸い、それを引き受けてくれたのが、ボストンの町の音楽の視学官——視学官といえますのは、先生の先生というような意味なのですが——をしていたメーソン氏でした。伊沢先生は、ボストンの町があまり遠くなかったので、毎週金曜日にメーソン先生のところへ通いました。すると、メーソン先生は伊沢先生を昼間は学校の視察につれて行き、夜は唱歌を教えてくれ、時には娘さんにピアノを弾かせて教えてくれたりしました。その上、夜遅くなれば、泊めてくれました。そうした心をこめた指導の結果、伊沢先生は卒業の時には音楽もちゃんと出来るようになったのです。その時、伊沢先生はつくづく思いました。いま日本からこうして外国に留学に来ている人たちは、私だけでなく、みんな音楽だの美術だのという教育は少しも受けて来ていない。日本の国は今までは国の中に落ち着きがなく、平和がなかったのだから、それも仕方がないことだ。けれども、これから先は、豊かな情操を発達させ、すぐれた文化を育むためには、日本でも全国の学校で

ぜひ音楽を教えるようにしなければならない。伊沢先生は、そういう考えを、当時留学生の監督官をしていた目賀田男爵という人と一緒に、日本の文部省に書いて送りました。文部省では、なるほどもっともだと、その意見を受け入れて、全国の学校でどんな具合に音楽を教えたらいいか、それにはまず調査研究をしなければならないと、明治12年に音楽取調掛を設けました。さらに、その音楽取調掛が母体になって、明治20年に東京音楽学校が生まれたのです。ところで、音楽取調掛や音楽学校の責任者には、いったい誰になってもらったらよいでしょうか。文部省が、では意見を出したあなたが責任者になってくださいと、伊沢先生に頼んだのは不思議ではありません。音楽取調掛の掛長も、東京音楽学校の最初の校長も伊沢先生がなさったのは、そのような事情によるものなのです。泣く子が笑ったという言葉がありますけれども、3日3晩泣いた伊沢先生は、いつの間にか、日本の音楽の指導者になっていました。伊沢先生は、音楽取調掛の責任者になると、日本の学校でどんな具合に音楽を取り入れたらよいか、その調査研究を手伝って欲しいと、早速一人の外国人教師を日本に招きました。それは、伊沢先生が心を打ち明けて相談できる留学中の恩師メーソン先生でした。

さて、このようにして見てくると、伊沢先生はご自分の苦手なものをいつの間にか得意なものに変えてしまう名人のように思えます。でも、考えてみましょう。骨も折らず、工夫もせず、熱心に腕を磨かない名人というのが、どこかにいるのでしょうか。伊沢先生は、何もしない名人ではありませんでした。先生はメーソン先生のお世話になっただけでなく、自分なりに精一杯の工夫をして、腕を磨きました。この高遠町の小学生や中学生の皆さんに、私はぜひ見ていただきたいものがひとつあるのです。それは、上伊那郷土館に保存されている伊沢先生愛用の一棹の三味線です。古びたなんの値打ちもない楽器のように見えますが、普通の三味線と違うのは、棹の部分にたくさん刻み目が付けてあることです。日本で三味線を弾く人は、棹に刻み目などは付けません。右手にばちを持ち、左手で棹の勘所をビシヤリと押さえて、欲しい音を出すのです。伊沢先生は三味線も弾けま

した。三味線音楽を弾くのだったら、棹に刻み目を付ける必要はありません。伊沢先生が、愛用の三味線の棹にご自分で刻み目を付けたのは、自分には不得意な西洋の音律や音階を身に付け、さらに日本と西洋の音律や音階を比較して研究するためだったのです。手垢でよごれて、古びた刻み目付きの三味線は、伊沢先生がどんなに努力なさったかを物語っています。それから、上伊那郷土館には伊沢先生の勉強なさったノートや作曲なさった曲の五線紙、お書きになったものの原稿などがたくさん保存されています。私は、今までに二度それを勉強しに来たことがあります。音楽学校で教えている教師の立場から、特に感心することがあります。それは、伊沢先生が「和声」つまり西洋風のハーモニーの勉強をなさって、ハーモニーに関する書物を出そうと原稿まで用意しておられた、ということです。その書物は、結局は出版されませんでしたから、筆と墨で書いた原稿の形で見る以外はありません。正直に言って、100年のちの今日から見れば、内容は初歩的なものです。けれども、日本の音楽と西洋の音楽の一番大きな違いは、三味線や箏曲などの日本の伝統音楽は旋律中心で、西洋の音楽の方は旋律のほかにハーモニーが付くということなのです。日本の音楽は、旋律が基本ですから、微妙に音の高さや音色を変化させたり、ゆるするような節廻しで緩をつけたり、間をとったりして、芸術性を高めています。西洋の音楽は、そのように旋律に手を加えることはあまりしないで、その代わり縦の響きのハーモニーで、いっそう美しく響くようにします。これは、音の高さが少しずれるとか、ずれないとか、そういうことより、もっともっと根本的な違いですから、それを勉強して身につけるのは、とてもたいへんなはず。ところが、伊沢先生は、三味線の棹に刻み目を付けて、音の高さを間違いなく歌えるように勉強なさただけでなく、もっと難しいハーモニーについても勉強して、まがりなりにも、人に教える教科書の原稿までお書きになりました。私はそのことを本当に感心せずにはいられません。

それでは、ここで伊沢先生のハーモニーの練習帳から、二つか三つの例をピアノで弾いてみましょう。〔譜例省略〕

伊沢先生のハーモニーの練習帳からの実例をお聞かせしましたが、ここで、もう一つ大切なことをお話しておかなければなりません。それは、伊沢先生が、現在あまり知られていませんが、たくさん歌を作曲なさったということです。ただ、そのことについては、いま詳しくお話するより、あとで私たちの学校の山本教官が、伊沢先生のお作りになった曲を3曲ほど——〈かり〉(歌)、〈あふぎみよ〉(歌)、〈紀元節〉(リコーダー)——実際にお聞かせすることに致します。

さて、伊沢先生は、今から108年前の明治12年に、音楽取調掛の仕事で東京でお始めになりました。メーソン先生と呼ばれて協力者になったことは、先ほどお話した通りです。差し当たっての仕事は、日本や外国には学校で教えるのに適したどんな曲があるかを調べることに、小学校や幼稚園の生徒に実際に歌わせてみて、様子を確かめることでした。その結果、これで良いという曲が出来ると、今度はそれを全国に広めなければなりません。今だったら、テレビやラジオを使って、「おかあさんといっしょ」や「みんなのうた」のような時間に放送すれば、1週間ぐらいで全国に広まるのですが、当時はテレビもラジオもありません。では、どうしたらよいでしょう。良い歌を全国に伝えることができる人をまず養成するのです。それを伝習生といいました。明治13年の10月に、男子9名女子13名、合わせて22名の人が音楽取調掛の最初の伝習生になりました。その上で、音楽取調掛の仕事が本格的に始まりました。もともと、始まるには始まったのですが、けっして楽な仕事ではありませんでした。伊沢先生は、当時のことを振り返って、こんな具合に言っておられます。

「こうしてメーソン先生も来たし、伝習生も出来た。けれどもそれ以外には何もない。楽器が1台あるでなく、唱歌の楽譜を書いた掛図1枚あるでなく、唱歌という言葉すらはっきりしていなかった。その内にメーソン先生にお願いしておいたオルガンが10台ほど届いたので、ようやく授業を始めたけれども、困ったことには音楽に関する言葉がないから、通訳することも出来なかった。ともかくまず1曲を教えるについては、それに必要な楽譜が出来る。するとそれに実際必要な音符の名前を——全音符と

か、半音符とか、4分の1音符とか——こしらえながら教える。そうした名前を定めるということが一通りや二通りの苦労ではなかった。曲については、メーソン先生が日本に来てから、日本の雅楽や俗楽を聞かせたところ、日本の曲は不思議なほどスコットランドの曲に似ている、古いイギリスの曲に似ているということで、スコットランドの曲を採用したものも少なくなかった。『蛍の光』や『思ひいづれば』などがその例である。なお、日本人の作った曲も必要だということで、雅楽の素養があり、西洋音楽のことも分かる人や、箏曲・長唄の人にも加わってもらって曲を作った。ところで、選んだ曲、出来た曲が適当かどうかを試さなければならない。そのために東京師範学校の付属小学校と女子師範学校の幼稚園で試そうとしたが、なかなか反対が多くて困った。それで文部省の役人呼んできて聞いてもらったら、『まことに結構であります、どうも眠くて困った』とか『お経文を聞くみたいだ』とかいう始末で、一時は殆ど絶望的な気分になった。ところが、メーソン先生が幼稚園で子供を集めて、ヴァイオリンで『蝶々』を演奏すると、子供たちは熱心に歌って、飽きることがない、という有様であった。そこで、この子供たちが成長して学校に入れば、わが国でも充分に音楽の教育はできると、自分を慰めた。

こうして音楽取調掛の仕事は動きだし、やがて伝習生たちも次々に育って、明治15年には4年制の音楽学校としてのカリキュラムも設けられました。伊沢先生はその間に、小学校の唱歌集や教室で使う掛図などを次々に作って、全国の学校で使えるようにしました。また、西洋や日本のたくさんのお楽譜や書物を集めて、西洋の音楽と日本の音楽はどこが違うのかを比べて研究し、古い時代のギリシアの音楽を日本の雅楽のオーケストラで演奏してみるというような実験もしました。伊沢先生の考えられた大きな理想は、西洋と日本の音楽のそれぞれ良いところを取って、日本という国にふさわしい音楽、「国歌」を興すということでした。伊沢先生は、日本の音楽を科学的に研究して海外に紹介することにも力を入れました。今から100年以上も前の明治17年から18年にかけて、イギリスのロンドンやアメリカのニュー・オーリンズで開かれた万国博覧会に、日本のいろいろな楽

器に添えて、日本の音律を測定して音叉にしたもの、日本の音階を掛図にしたものなどを出品し、海外でもたいへん高い評判を取りました。伊沢先生は、その時海外の音楽の研究者と英語の手紙で堂々としたやりとりをしておられます。そしていよいよ今から100年前の明治20年、音楽取調掛の4年制のカリキュラムを勉強した人たちの第2回の卒業式で、ベートーヴェンの〈交響曲第1番〉の一部が演奏され、その年の10月に音楽取調掛は東京音楽学校に生まれ変わったのです。今日は、それを記念して、このあとに続く演奏会では、私たちの学校の遠藤教官がオーケストラを指揮してベートーヴェンの〈交響曲第1番〉を全曲演奏致します。

明治12年から20年までのわずか8年の間に、伊沢先生の指導のもとで、日本の音楽教育はめざましい発展をとげ、専門の音楽学校まで生まれました。けれども、世の中にはいろいろ思いがけないことがあるものなのです。明治23年に今の日本の国会に当たる帝国議会のできますと、そこで音楽学校などいらないという議論が起こりました。当時の日本は、国の富を豊かにし、戦争に勝てるように兵力を強くするのだという富国強兵への道を走っていましたから、音楽などは何も役に立たないし、だいたい男子と女子の生徒と一緒に勉強するのはけしからん、というような今では理解できないような議論が本当に渦巻いたのです。東京音楽学校の初代の校長だった伊沢先生は、議会に出席して、「いやそうではない。音楽は必要だ」と主張して一歩もあとに引きませんでした。高遠の進徳館で「理八小僧」のあだ名を取った伊沢先生は、年をとっても自分の主張は曲げない人でした。その他にも、文部省の内部で考え方の喰い違いがあったりして、とうとう伊沢先生は明治24年に音楽学校の校長の仕事をやめなければならないことになりました。しかし、伊沢先生はやむをえず校長を辞めても、音楽学校のことを大切に思っておられました。伊沢先生がお辞めになった後、東京音楽学校は独立した学校から格下げされて東京高等師範学校の付属学校になった時期がありました。それでは肩身が狭い思いがすることは言うまでもありません。伊沢先生は、明治31年にご自分の他に19名の同士を集めて、音楽学校の再独立のために立ち上がって下さったのです。翌年、私

たちの学校は晴れて、独立した音楽学校に戻りました。ちょうどその頃、卒業して母校の教壇に立ったのが、〈荒城の月〉や〈春のうららの隅田川〉などで有名な滝廉太郎です。その後、東京音楽学校は数えきれないほどの日本を背負う音楽家を生み出し、またあとで曲の一部を聞いていただくグルックの「オルフェオ」などたくさんの曲を初演して世の中に紹介しながら、さかんになっていきました。明治44年の6月に、東京音楽学校の講堂（奏楽堂）で、伊沢先生の還暦のお祝いの催しが盛大に開かれました。その時、音楽学校の生徒たちはみんなで歌を歌って伊沢先生への贈り物にしました。明治時代の歌というのは、たいがい歌詞が難しいので、やさしく言いますと、「日本という国のために朝も夕べも音楽の花を育ててくださった伊沢先生。称えましょう、称えましょう、あなたのご功績を」と歌ったのです。

さて、私の話はそろそろお終いです。ただ最後に、ほんの少し付け加えておかねばならないことがあります。伊沢先生は、日本の音楽教育に大きなお仕事を残されただけでなく、本当に偉大な教育者でした。いま日本中の幼稚園では、遊戯をしますが、幼稚園に最初に遊戯を取り入れられたのは伊沢先生です。伊沢先生は、目の不自由な人、言葉の不自由な人の教育にも熱心に取り組まれました。生涯に5000人もの吃りを直されたことは、グラハム・ベルさんとの出会いのところでお話した通りです。また今日という体操教育を広めることにも功績がありました。胸の周りを胸囲と言い、握る力を握力と言いますが、今から100年以上も前に、そういう言葉を作り、体格や体力を科学的に測定しなければならないと言われたのは伊沢先生です。若い頃から理科がお好きだった伊沢先生は、東京師範学校で心理学や物理学の授業を受け持たれ、さらに日本で最初に日食を観測して、その観測の記事は、アメリカの権威のある『ネイチャー』という自然科学の雑誌に載りました。けれども、いちばん大切なことは、伊沢先生が生涯をかけて、国民のみんなが良い教育を受けられるように骨を折られたということです。ご自分でも強く主張し、仲間を集めて、そのことに取り組まれました。まるでウソのように思われるかも知れませんが、今から

100年前の明治20年頃、日本中には小学校に行つて勉強するはずの子供が約700万人いたのに、実際に学校に通う子供はその半数の350万にも足りませんでした（未就学児童数366万）。それというのも、小学校に通う子供の家庭からかなりの授業料をとっていたからです。伊沢先生は、家庭が豊かでも、貧しくても、みんなが勉強できるように、国家がもっともお金を出すべきだ。教科書は、出来るだけよい教科書をタダか、タダに近い値段で配るべきだ、と主張しました。この伊沢先生の主張は少しずつ実現されていきましたが、完全に実現されたのはそれから何十年もたった第二次世界大戦のあとのことです。お陰で私たちは、そのことを本当に、空気のように、水のように当たり前だ、と思うことが今日できるようになったのです。

もちろん、そのような伊沢先生ですが、若い頃にはつまらない兄弟喧嘩をして、お父さんに叱られたこともありました。人間は決して神様ではなく、完全ではありません。伊沢先生の物事の考え方を批評して、国家主義的であるとか、また伊沢先生が編纂された唱歌集を調べて、忠君愛国というような考え方やおしきせの情操教育が目立ちすぎるといふ人もいます。それはそうかも知れませんが、でも、明治20年頃という時代には、それ以外のことを考えることは誰だって難しかったでしょう。私が伊沢先生の言葉の中で、すばらしいと思うのは、「真善美は官定すべきものに非ず」というお言葉です。分かりやすく言いますと、「何が本当か、何がよいことか、何が美しいかは、お役所が決めてはならない。一人一人が考え、またみんな考えてゆかなければならない」ということなのです。

そうしたすべてのことについて充分にお話することは出来ませんでした。でも皆さんは、伊沢先生という方について、前より少し分かっていただけかと思います。伊沢先生は、偉大な教育者でしたが、特に28歳から40歳までの12年間、私たちの音楽学校を大切に育て、ご自分は校長というお仕事を退いても、なお守って下さいました。100年たった今、こうして私をはじめ私たちの学校の教官と学生が連れだって先生のご郷里を訪ね、皆さんとご一緒に音楽の喜びを分かちあうことができるのは、本当に嬉しいこ

となのです。では、これで私の話を終わります。

伊沢修二記念祭きっかけに “花の高速、音楽の町づくり”
芸大と夢の “ハーモニー”

郷土が生んだ偉大な教育者・伊沢修二をたたえ、後世に伝えようと、上伊那郡高遠町で、今月下旬から十一月上旬にかけて没後七十年の記念事業が行われる。修二が初代校長を務めた東京音楽学校(現東京芸術大学)も、ことしが創立百周年。同大学音楽学部の協力で、芸大オーケストラの演奏なども実現する。町は昨年「ルネッサンス高遠」運動を展開していることもあり、これを機に「音楽の町」づくりを、と意欲を見せている。

同町は旧高遠藩三万三千石の城下町。現在、人口八千五百人余の小さな町だが、春には千三百本ものコヒガンザクラが咲き乱れる高遠城跡公園は、全国的にも観光の名所として知られている。

「高遠は歴史と桜の町。合併三十周年を機に、新しい文化を創造しよう」と、町は昨年「ルネッサンス高遠」運動を展開。「桜シンポジウム」(六十一年九月)や「高遠工芸村づくりシンポジウム」(今月十日)などを行ってきた。「伊沢修二先生記念祭」も、その一環。昨年秋から準備を進めてきた。

この過程で東京音楽学校も創立百周年であることが分かった。このため、東京芸大音楽学部に協力を要請したところ「学部を挙げて協力する」と快諾され、記念事業に弾みがついた。〔後略〕

〔原資料縦組〕

(『信濃毎日新聞』昭和62年10月16日 認932301)

吹奏楽第53回定期演奏会

1987年11月24日(火)

簡易保険会館大ホール

開場●6:00 開演●6:30

プログラム

1. エムブレム……………A. コープランド
Emblems A. Copland
2. 異国の鳥たち……………O. メシアン
Oiseaux Exotiques O. Messiaen
3. クリスマス イントラダ ……………A. リード
A Christmas Intrada A. Reed
4. そして、どこにも山の姿はない……………J. シュヴァントナー
and the mountain rising nowhere J. Schwanter
5. ダフニスとクロエ 第2組曲……………M. J. ラヴェル
Daphnis et Chloé M. J. Ravel

R. ブートリー編曲
Arr. R. Boutry

指揮 小田野 宏之
Conductor Hiroyuki Odano

ピアノ独奏 小池 ちとせ
Solo Piano Chitose Koike

演奏 東京芸術大学音楽学部管打楽器専攻学生
Tokyo Geijutsu Daigaku Wind Ensemble

100周年記念演奏会Ⅶ(オーケストラ第227回定期演奏会・合唱付)

1987年11月27日(金) サントリー大ホール

開場●6:00 開演●6:30

主催●東京芸術大学音楽学部

後援●読売新聞社

プログラム

グレの歌.....A. シェーンベルク
Gurrelieder für Soli, Chor, und Orchester
Arnold Schönberg

テキスト: J. P. ヤコブセン Text: Jens Peter Jacobsen
 ドイツ語訳: R. F. アルノルト Translation: Robert Franz Arnold

指揮: 若杉 弘 Conductor: Hiroshi Wakasugi

ヴァルデマル: 大野 徹也 Waldemar: Tetsuya Ono

トーヴェ: 西 明美 Tove: Akemi Nishi

山鳩: 伊原直子 Waldtaube: Naoko Ihara

農夫: 多田羅 迪夫 Bauer: Michio Tataru

道化師クラウス: 篠崎 義昭 Klaus Narr: Yoshiaki Shinozaki

語り手: 原田 茂生 Sprecher: Shigeo Harada

合唱指導: 田中 信昭, 八尋和美

Chorus Masters: Nobuaki Tanaka, Kazumi Yahiro

練習ピアニスト: 小池ちとせ, 古渡裕子, 大島義彰, 岡本和之

管弦楽: 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部
 Orchestra: Geidai Philharmonia

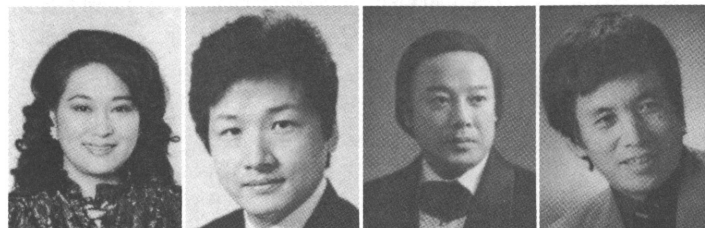
合唱: 東京芸術大学音楽学部声楽科学生
 Chorus: Students majoring in vocal music



若杉 弘

大野徹也

西 明美



伊原直子

多田羅迪夫

篠崎義昭

原田茂生

東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部
 Members of GEIDAI PHILHARMONIA

管弦楽研究部長 堀江 泰氏 首席コンサートマスター 田中 千香士
 副部長 田中 千香士 景山 誠治
 村井 祐児 コンサートマスター 井後 勝彦
 川 晶正雄

Violins

市田 雅子
 井後 勝彦
 稲村 優子
 岩崎 眉乃
 上田 京子
 景山 誠治
 蒲生 克郷
 川 晶正雄
 上阪 則子
 近藤 淑子
 白井 英治
 鷲見 康郎
 高 晶 浩

田口 重子
 田中 千香士
 伊達 富子
 中馬 敬子
 長沢 正康
 中野 秀男
 新谷 絵美
 西岡 笙子
 二村 英比古
 細谷 雄紀
 福本 俊夫
 三上 徹
 茂木 久子
 矢島 佳子

吉沢 かおる
 ●浅井 千裕
 ●荒川 以津美
 ●小宮 直
 ●原田 美佳
 Violas
 大野 かおる
 河合 訓子
 国嶋 恭子
 鈴木 治子
 中島 忠夫
 中塚 良昭
 林 勝彦
 広瀬 雅子

Violoncellos
 小沢 豊
 加藤 知子
 草薙 晴美
 田中 雅弘
 田村 宏
 長沢 正孝
 毛利 巨座
 渡部 宏
 ●服部 誠

●船田裕子	Oboes	高野哲夫	●小倉史生
●丸山泰雄	石橋雅一	松村正春	●久貝 聡
●杉田雅美	河野 剛	南 浩之	Tubas
Double Basses	原田知篤	守山光三	○佐藤 潔
片山敏夫	●鈴木純子	●松浦光男	○渡辺 功
黒川 健	●松波亜京美	●塚田 聡	Timpani &
桜井 茂	Clarinets	●奈良 寿	Percussions
杉原茂範	新井淑之	●和田博史	秋山 気清
永島義男	海鋒正毅	Trumpets	有賀誠門
吉田 秀	田口利定	大蔵康義	木村和彦
●五十嵐元美	●那須ちか	藤井 完	松倉利之
●上野葉子	●三戸由香	山本武雄	●田邊由紀
●黒木岩寿	●皆川裕子	●島田俊雄	●鈴木優子
●吉田水子	●畑中真理	●小原裕樹	●宮崎 仁
Flutes	Bassoons	●藤井美智	●鷹羽香緒里
中川昌三	大島篠亮	●前田 進	Harp
長谷川 博	前田信吉	Bass Trumpet	○山崎祐介
藤田明子	前田正志	●牛渡克之	●松田しのぶ
●石川裕子	●山浦正宏	Trombones	Celesta
●立住若菜	●桔川由美	沖野信雄	●岡本和之
●福田靖子	Horns	栗田雅勝	●印は大学院生お
●宮田真佐子	飯笹浩二	田中康之	よび学部学生
●湯本洋司	沢 敦	野武重忠	○印は賛助出演

ごあいさつ

東京芸術大学音楽学部長 服部 幸三

東京芸術大学音楽学部は、伊沢修二の手で明治20年10月4日に東京音楽学校が開設されてから数えて、本年、創立100周年を迎えました。それを記念して今年5月以来、数々の記念の行事を行って来ましたが、その最後

を飾るのが、今日のシェーンベルク作曲《グレの歌》の演奏であります。

なぜ、今《グレの歌》なのか。もちろん、それは選択肢のひとつにすぎません。ただ、芸大音楽学部では、かねてから、11月という月に年間のカリキュラムの仕上げの一部として合唱付のオーケストラ演奏会を催し、12月には朝日新聞厚生文化事業団主催の《メサイア》に賛助出演して社会に奉仕することを、ならわしとして来ました。今年も、その枠組を崩すことなく、熱をおびて繰り広げられて来た100周年記念演奏の締め括りにふさわしい曲目として、このシェーンベルクの大作を取り上げたものと、ご理解をお願いします。

《グレの歌》のような大編成の曲を演奏するには、それなりの努力を必要としますが、私達は今回の演奏が、卒業生である指揮者若杉弘のもとに、独唱には教官が、合唱には学生が当たり、管弦楽は教官・学生が渾然一体となって演奏し、100周年の年の芸大音楽学部の持てる力を、集約した形でお聴きいただけることに特別の意義があるものと信じています。

最後に、東京芸術大学音楽学部の100周年記念事業に、多くの方々から温かいご支援とご協力を賜りましたことに、心から御礼申し上げます。

〔批評〕

百周年演奏会の最後飾り 若杉指揮の〈グレの歌〉

東京芸大創立百周年記念演奏会の掉尾（ちょうび）を飾るシェーンベルクの合唱付き大作〈グレの歌〉が、世界的に活躍する若杉弘氏の指揮による東京芸大音楽学部管弦楽研究部により、十一月二十七日午後六時半、東京・赤坂のサントリーホールで演奏される。

〈グレの歌〉は、現代音楽の巨匠シェーンベルクがデンマークの詩人、ヤコブセンの詩に基づき、デンマークの王、ワルデマルとグレの城の乙女、トーベとの悲恋をもとに作曲したもので、後期ロマン派の名残をとどめた二十世紀初頭の傑作。

大編成のオーケストラとコーラスを要するため、“幻の大曲”といわれるほど演奏の機会は少なく、わが国では今度でようやく三回目。

今回指揮をする若杉氏は、東京芸大出身で、しかも二十年前、読売日響とこの曲の日本初演を果たしており、これ以上望めない人選であろう。

独唱陣は大野徹也、西明美、伊原直子、多田羅迪夫、篠崎義昭、原田茂生と、すべて同大あるいは同大大学院の卒業生で固めている。同大管弦楽研究部のオーケストラは教官と学生から成り、今回は約百三十人の大編成。また合唱は約二百六十人で、声楽専攻の在校生が総出に近い形という、記念演奏会にふさわしいオール芸大のスケール。

若杉氏は「音楽アカデミズムの牙城（がじょう）である東京芸大が、超前衛とはいえないにせよ新音楽の部類に入る〈グレの歌〉を取り上げることは、二十一世紀へ向けて冒険してみようとする意欲の表れ」と高く評価する。

同氏は〈グレの歌〉をフィンランドのオーケストラと十年ほど前のヘルシンキ音楽祭で演奏した折、デンマークに伝わるグレの城の跡を訪れた。その城跡に立った時、「作品とのきずなができた」と心から感じたそうで、以来この作品に対して新たな確信が持てたという。

若杉氏が東京芸大卒業後、母校のオーケストラの指揮台に立つのは初めて。「最初は自分のように気ままに演奏活動をしている人間が、突然呼ばれていいのかな、と思いました。これも学校側が学生を新しい外の風に当ててやろうとする意気込みでしょう」と、大学の積極的な姿勢を喜んでい

【原資料綴組】

（『読賣新聞』昭和62年10月27日）

驚嘆に値する「グレの歌」の合唱 東京芸大創立100周年記念演奏会
若杉弘指揮・芸大オーケストラ

一連の東京芸術大学創立一〇〇周年記念行事の最後を飾るコンサートとして、シェーンベルクの大作「グレの歌」が演奏された。演奏者は、指揮が若杉弘、オーケストラが芸大音楽学部管弦楽研究部、独唱者は同大学の教官ないし卒業生、そして合唱が同大学声楽科学生ということで、いわば、現時点での芸大の総力を結集した行事である。

ところで、後期ロマン派の巨大趣味の代表的作品として、いつも引き合

いに出される「グレの歌」であるが、シェーンベルクがこのような巨大なオーケストラ（一四八名一但し、今回は舞台に乗りきらないということ）で、弦の数を多少減らしていた）を必要としたのは、耳を圧せんばかりの大きな音響というばかりでなく、各パートを細分化することによって得られる、繊細な音色のためであったことは明らかである。したがって、この作品の演奏において第一に求められるのは、響きの色彩に対する鋭敏な感応ということになろう。

この曲の日本初演者でもある若杉は、一昨年度のドビュッシーの「ペレアス」に続いて、昨年度はマーラーの「千人の交響曲」、今年度も、バルトークやラヴェルの舞台作品（いずれも演奏会形式）といった言葉を伴った作品において、言葉と色彩への見事な感応ぶりで、聴衆に鮮烈な印象を与えてきたが、今回も、指揮者に彼を選んだことが、この記念コンサートの成功を半ば約束するものとなった。

独唱者の中では、トーヴェの西明美と山鳩の伊原直子の女声陣二人が秀逸。中でも第一部最後を締めくくった伊原の歌唱は、圧倒的な名唱といつてよいだろう。男声陣のなかでは、農夫の多田羅迪夫が印象的な歌唱を聴かせ、道化師の篠崎義昭も性格的な役どころを巧みに押さえた歌いぶりであった。

ヴァルデマルを歌った大野徹也は、力演ではあったが、喉に幾分疲れを感じさせる歌唱で、数年前の「ジークフリート」の鮮烈な印象からすると別人の感がする。また、語り手の原田茂生は、唯一人シュプレッヒ・ゲザングで歌う重要な役どころであるが、肝心のシュプレッヒ・ゲザングが掌中のものとなりきっておらず、発音の悪さも気になった。

舞台後方の客席に配された合唱は、驚嘆に値する。とくに、唯一混声のフル編成で歌われる終曲では、オーケストラとともに会場全体を大音響の渦に巻き込み、すべての聴衆を圧倒していた。本来、教官たちの固定メンバーによる編成のオーケストラ（コンサート・マスター・田中千香士）は、今回は多くの学生がエキストラとして加えられていたが、これも若杉の要求によく答えた力演であった。（11月27日、サントリホール）

安藤 博

〔原資料縦組〕

(『週刊オン・ステージ新聞』昭和62年12月18日)

「グレ」成立から約80年。日本の洋楽受容史
とも重なる本公演は芸大100年を飾る壮挙に

樋口 隆一

昨年創立一〇〇周年を祝った東京芸術大学が、五月から七回にわたって催した一連の記念演奏会の有終の美を飾ったのは、若杉弘を指揮者に迎えての《グレの歌》であった。

アーノルト・シェーンベルクの《グレの歌》は、北欧伝説に取材したデンマークの作家ヤコブセンの小説のドイツ語訳をテキストとして、作曲者が一九〇〇年から一一年までの十一年余を費やして完成させた超大作である。独唱群、合唱に加え、オーケストラも、木管群、金管群ともに二十五楽器に及び、それにふさわしく大編成の弦楽器群も、例えば第一ヴァイオリンが最高九声部、第二ヴァイオリンに至っては最高十声部に分けられるという強大なもので、まさに教官、学生一体となつての記念事業の終幕にふさわしい曲目であった。また芸大の卒業生でもある指揮者の若杉弘は、一九六七年にはこの作品を日本初演したうえ先年もヘルシンキ音楽祭でこの作品を指揮して絶讃を博しており、チューリヒ・トーンハレ協会芸術監督兼東京都交響楽団音楽監督、ドレスデン国立歌劇場常任指揮者というキャリアからも、この記念すべき祝典の指揮を取るに適切な人物といえよう。

《グレの歌》は音楽史的観点からも芸大一〇〇年を祝うのにふさわしい作品だ。シェーンベルクが筆を執った一九〇〇年には滝廉太郎が、そして完成の前年にあたる一九一〇年には山田耕筰がドイツに留学しており、その間の一九〇二年には東京音楽学校はシューベルトの《未完成》を、さらに、翌〇三年にはグルックの《オルフェウス》を日本初演しているからである。滝廉太郎から山田耕筰までの十年が、日本の作曲界の最初の飛躍的な進歩を象徴するように、《グレの歌》成立からこの演奏会までの約八十

年は同時に、奇跡的ともいえる日本の洋楽受容史そのものを意味しているからである。《グレの歌》の上演それ自体がすでにあらゆる困難の集積であることを知る者は、それが単独の音楽大学の教官と学生によって上演されたことの重大さに深い敬意を表する。これは欧米のいかなる音楽教育機関の関係者に対しても誇りうる壮挙である。

独唱者について言えば、第一部と第三部をそれぞれ総括する役割を演じる山鳩の伊原直子と語り手の原田茂生とがさすが貫祿で存在感を示し、トーヴェの西明美もヒロインにふさわしい美しい歌唱を、そして農夫の多田羅迪夫と道化師クラウスの篠崎義昭もそれぞれ個性豊かな歌唱を聴かせてくれた。ヴァルデマルの大野徹也は大型ヘルデン・テノールとして期待の逸材だが、まだ声量不足。大オーケストラをさらに越えて響き渡る発声の研究と習得とを望みたい。しかしこの演奏会の真の主役が、声楽科学生たちによる合唱(指導・田中信昭、八尋和美)と管弦楽研究部のオーケストラであったことは言うまでもない。(87年11月27日・サントリーホール)

〔原資料縦組〕

(『音楽芸術』第46巻第2号、昭和63年2月、111頁)

オーケストラ第228回定期演奏会(学生オーケストラ)

1987年12月3日(木)

五反田簡易保険ホール

開演●6時30分

プログラム

●「レオノーレ」序曲 第3番 ハ長調 作品72b……ベートーヴェン
Ouverture Leonore Nr. 3 C-Dur Op. 72 b

L. v. Beethoven

指揮 佐藤功太郎
Cond. Kotaro Sato

- 組曲「ばらの騎士」 作品59.....R. シュトラウス
Der Rosenkavalier-Suite Op. 59 R. Strauss

指揮 松尾葉子
Cond. Yoko Matsuo

——休 憩——

- 交響曲 第2番 ニ長調 作品73.....ブラームス
Symphonie Nr. 2 D-Dur Op. 73 J. Brahms

指揮 遠藤雅古
Cond. Masahisa Endo

- シンフォニエッタ.....ヤナーチェク
Sinfonietta L. Janáček

指揮 佐藤功太郎
Cond. Kotaro Sato

その他の100周年記念演奏会の批評および関連記事

東京芸大 所蔵美術品を公開
創立100周年で記念事業

わが国の美術界、音楽界を代表する数多くの芸術家を育てた東京芸術大学は、今年、創立百周年を迎える。これを記念して同大学は、五月から十一月にかけ記念事業を行うことを決めこのほどその内容を発表した。ふだんは見られない所蔵美術品を一般に公開したり、教官、学生、卒業生による記念演奏会など見逃せない催しになりそうだ。〔中略〕

音楽学部の催しの目玉は、三月二十七日に上野公園内に復元、落成した日本最初の演奏ホール「奏楽堂」で行う演奏会。本場の演奏家が奏するジャワの宮廷音楽ガムランや、教官と学生による室内楽、わが国初のオペラの再演もある。

〔原資料縦組〕

（『日本経済新聞』昭和62年4月20日）

◎創立100周年記念事業始まる

=東京芸大、演奏会や展覧会など=

今年十月に創立百周年を迎える東京芸術大学の記念事業が五月三十日スタートした。この日は、午後七時から東京・アークヒルズのサントリーホールで、記念特別演奏会の第一弾として、満席の聴衆を前に、ジャン・フルネ指揮、同大管弦楽研究部演奏による幻想交響曲作品一四（ペルリオーズ）などのオーケストラ演奏会が開かれた。同大では百年の歴史の集大成として引き続き九月、十月、十一月に記念演奏会を開くことにしている。

〔原資料縦組〕

（『文教速報』第4200号，昭和62年6月5日）

華やかに創立100周年記念事業—東京芸術大学—

明治20年創立の東京美術学校、東京音楽学校を母体とする東京芸術大学（国立）が創立100周年を迎えた。この間美術・音楽の専門教育の機関としてまた博士課程も有する研究機関として、わが国の芸術界の発展に大きな役割を果たしており、これからの国際間の芸術交流、相互理解に期待がかけられている。予定されている記念事業は次のとおり。〔中略〕

また百年史刊行や芸術国際交流基金の設立も計画されている。

（『旺文社大学受験講座ラジオテキスト』昭和62年6月号）

◎東京芸大、創立百周年祝う

=三笠宮殿下ら出席し華やかに=

東京芸術大学は、十月四日午前十一時から音楽学部第六ホールで、創立百周年記念式典を挙行了。式典には、藤本学長、中根美術学部長、服部音楽学部長、福井元学長ら同大関係者をはじめ、阿部高等教育局長（文部大臣代理）、森東大総長（国立大学協会会長）ら約五百人が出席した。また、引き続いて開かれた祝賀会には、同大講師を務める三笠宮殿下もご出席され、お祝いのお言葉を述べられた。

〔原資料縦組〕

（『文教速報』第4255号，昭和62年10月14日）

東京芸術大学創立100周年記念式典及び祝賀会について

昭和62年10月4日(日)、東京芸術大学創立100周年記念式典及び祝賀会が、音楽学部第6ホール並びに体育館で行われた。

午前11時に藤本学長の式辞で始まり、続いて塩川文部大臣、森国立大学協会会長、福井元学長から祝辞をいただき、終わりに邦楽科教官による特別演奏をもって式典を終了した。式は平穩に、かつ厳肅に取り行われた。

祝賀会は、正午過ぎから、体育館において、藤本学長の挨拶、山本前学長からの祝辞、そして、三笠宮崇仁殿下の乾杯の発声で始まり、出席者各位、なごやかな雰囲気の中で午後2時頃、終宴した。

(『東京芸術大学学報』第257号、昭和62年10月15日)

東京芸術大学創立100周年記念

II 邦楽定期・第37回

III オーケストラ定期・第226回〈100周年記念新作展〉

何と美的に形成された邦楽の世界だったことか。

新作展も久々に収穫を得た一夜だった

富樫 康

東京芸術大学では創立一〇〇周年を記念していくつかの演奏会を開催したが、その中の邦楽とオーケストラ新作展について記す。

邦楽は現代人の間では、完成された世界という固定観念ができています。しかもそれは侵し難い世界で、先達から継承し、後進に伝えるのが習わしとなっている。芸大百年記念邦楽演奏会は、現職教官、学生および卒業生が参加して、先ず開校の祖、伊沢修二の作詩した《晴天の鶴》の十人合同演奏によって開幕された。あとは箏曲《根曳の松》、尺八《鹿の遠音》、《鶴の巣籠》、箏曲《都の春》、長唄《鶴亀》、舞囃子《田村》、狂言《福の神》、能《高砂》が演じられた。その何れもが優れた模範的演奏と思われたが、筆者が最も気に入ったのは長唄《鶴亀》である。それは四十三名による合奏であるが、三味線と女声の語り歌がもたらす「艶」ともいべきエステ

ティックが独特だからである。これだけは洋楽からは求められない世界である。

また邦楽全般に言えることだが出演者たちの服装や演奏の立ち振る舞いが、何と美的に形成されていることか。殊に太鼓を打つときの撥の持ち方、振りあげ方、降ろし方が、完成された形式美によって整えられていることにいつもながら感心するのである。

(9月16日・国立劇場)

芸大オーケストラ第二二六回定期の方は「一〇〇周年記念新作展」として六人の教官による新作が披露された。

まず南弘明作曲《電子交響曲・第三番》で、これはシンセサイザーで作成した電子音をテープ録音して流すのではなく、作曲者が機器を目前で操作しながら作った音を、そのまま会場のスピーカーから流すという方法で演奏された。こうしたシンセサイザーから作られた音楽を鑑賞するのも筆者は嫌いではない。この場合は従来の楽器音とは著しく異なった音質の響きを合成して交響曲にしたわけで、その音質は通常地球上に存在する音ではなく、もしや地球以外の或る惑星の中に在るのかも知れないといった想像にかられるのである。

ついで尾高惇忠作曲の《弦楽四重奏曲》は一つの心境小説的な音楽といえる。尾高の心境は決して楽天的ではなく、むしろ陰性で、閉じ籠りがちであり、孤独である。しかもその発露の仕方が、マーラーのごとく響きの美しさでカヴァーされていれば救われるのだが、心が滅入る一方の表現なところに問題が残るのだ。だがその演奏は申し分ないものであった。(田中千香士、石川光太郎、川崎和憲、田中雅弘)

松村禎三の《プネウマ》は弦楽合奏曲だが、これも心境吐露的な音楽である。作曲者は《プネウマ》をギリシャ語で、風、息、霊と三つの意味があると説いていたが、筆者にはそういった自然現象的なものでなく、心理的な内容を感じるので、三者の中では霊だけが該当するわけだ。弦楽のみとはいえ、かなり表現力のあるものと思ってきいたが、これからという所で終わってしまった。その続きが書かれることを期待する。(作曲家指揮)

野田暉行の《交響的壁画》—祝典幻想曲—は、これをきいて作曲者はR・シュトラウスが行った交響詩といった形式に憧憬をいだいているのではなかろうかと思った。あの巨大主義。すべてを包括してしまう容積の大きさ。色々な種類の人間が住み、生活を営んで一つの大きな国家を形成するように、音響の姿態のすべてを包含して、巨大な集塊の中に閉じこめ、それを統御して、一つの方向へ向かわしめる統率力に快哉を感じる作曲者の意志を感じずにはいられなかった。彼の作品の中でも自信作といえるにちがいない（作曲家指揮）。

浦田健次郎の《シェーナ》では、絢爛たる芸術には興味がなく、「単純な深さ」を求める作曲者の意識は、前作《交響曲》でもそうであったが、この《シェーナ》でもそれを徹底して追及していることが理解できた。ともすれば単純が軽薄に墮する弊害に陥ることなく、重みと深遠の度合を附加することに腐心した形跡は明瞭によみとれる。浦田は腰の坐った、器の大きな性格の持ち主として異彩を放っている（小鍛冶邦隆指揮）。

最後は佐藤眞の《管弦楽のための協奏曲》。《ラブソディ》以来《第三交響曲》、《ピアノ協奏曲》と最近の佐藤眞の猛進撃ぶりは目をみはるものがある。この音楽から筆者の盲想を言わせてもらえば、その進撃は狂暴であり、まるで周囲に当たり散らすようで、はらはらするほどである。その強烈で刺戟的な音楽から聴衆はズタズタに着衣を破られ、水をかけられ、わが身を傷だらけにされながら、それでいてしかも文句を言わないのだ。言わぬ所か、そのことにむしろ快感を感じるマゾヒズム的な嗜好を感じるのである。とにかく豪快な傑作だ（作曲家指揮）。

以上四曲を演奏したこのオーケストラは学生と思えぬほど高度な技術をもっていたし、また久々に収穫を得たような一夜であった。

（9月19日・サントリーホール）

〔原資料縦組〕

『音楽芸術』第45巻第11号，昭和62年11月，120～121頁）

IVガムラン演奏会

VIオペラ公演「オルフェオとエウリディーチェ」

東京芸術大学創立一〇〇周年記念事業の一つとして、グルック《オルフェオとエウリディーチェ》が旧奏楽堂で上演された。無論、明治三十六年、東京音楽学校で行われたいわば日本オペラ事始めとも言うべき同作品の本邦初演を踏まえての催しである。当然のことながら、指揮、演出、出演者たち、いずれも現代の立場からこの作品を創り上げたのだが、それでも私は、ノエル・ペリーを想い、ケーベル博士に心を馳せ、柴田（三浦）環を偲んで、しばし往時を夢見たのであった。

中村洪介

東京芸術大学創立一〇〇周年記念演奏会一環としてガムランの演奏会が奏楽堂で開かれた。日本における西洋音楽の修学を中心として発展してきた芸大が、この記念すべき年にガムランの演奏会を開いたということは、非常に意義あることと思う。これはひとえに、西洋中心主義から世界各地の音楽へと目を向けるべく尽力された、故小泉文夫教授の努力の賜物といえよう。当日は、以前芸大のガムランを五年間にわたり指導していたサプトノ氏、他四名の演奏家、舞踏家をインドネシアから招いての公演であった。また、単にインドネシアのガムランを演奏するだけに留まらず、菅野由弘の《星流譜》を初演するなど、日本におけるガムラン音楽のひとつのありかたを提示した公演といえよう。

松下 功

〔原資料縦組〕

『音楽芸術』第45巻第12号，昭和62年12月，8～9頁）